令和６年度

公共ホール邦楽活性化事業報告書

一般財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的な文化・芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業を実施しています。

これらの事業の一環として地域創造では、平成22年度から都道府県や政令指定都市を対象とした邦楽地域活性化事業を実施してきましたが、令和３年度から対象を市町村等に変更して、「公共ホール邦楽活性化事業」を実施しています。

公共ホール邦楽活性化事業は、アウトリーチの研修を終えた邦楽の演奏家と、専門家であるコーディネーターを市町村等に派遣し、公共ホールと演奏家が共同で企画した参加体験型の地域交流プログラムと、コンサートなどのホールプログラムを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、日本の伝統音楽の継承発展、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国６の団体との共催により実施された、「令和６年度公共ホール邦楽活性化事業」の内容を取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当者による事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターによるレポートを掲載し、事業に関して気づいた点や、企画・制作のノウハウ、事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点を、ケーススタディとして記録しています。あわせて、邦楽アウトリーチの実例として、各地域交流プログラムの進行シートを掲載しています。

全国の地方公共団体ならびに公共ホールのみなさまにおかれましては、邦楽に関する地域交流プログラムも含めた自主事業にお取り組みいただき、本報告書をご活用いただければ幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施いただいた実施団体、各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいた演奏家、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、その他多くの関係者の皆さま方のご協力のもと、令和６年度の事業を実施することができましたことに対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

（本文中の社名、所属、役職等は令和６年度のものです）

Ⅰ．令和６年度公共ホール邦楽活性化事業の概要…… 5
実施概要…… 6
事業体制・実施日程…… 7
全体研修会実施概要…… 8
チーフコーディネーター：児玉　真…… 9

Ⅱ．令和６年度公共ホール邦楽活性化事業報告……11
＜福島県白河市＞
実施団体報告：金澤　真人（特定非営利活動法人カルチャーネットワーク）……12
コーディネーターレポート：大久保　真利子……16
進行シート：吉田　佐和子……18

＜兵庫県養父市＞
実施団体報告：北山　佳奈（養父市市民生活部まちづくり文化交流課）……20
コーディネーターレポート：丹羽　梓……24
進行シート：名取　萌音……27

＜福岡県中間市＞
実施団体報告：木村　圭佑（公益財団法人中間市文化振興財団）……28
コーディネーターレポート：伊藤　由貴子……32
進行シート：田中　舞……34

＜熊本県益城町＞
実施団体報告：山森　英雄（益城文化会館管理運営共同企業体）……36
コーディネーターレポート：谷垣内　和子……40
進行シート：小松　淳子……42

＜宮崎県都城市＞
実施団体報告：假屋　沙織（都城市文化振興財団・舞台事業組合共同事業体）……43
コーディネーターレポート：伊藤　由貴子……47
進行シート：林　真智子……49

＜沖縄県名護市＞
実施団体報告：阪上　成子（名護市地域経済部文化スポーツ振興課）……50
コーディネーターレポート：米澤　浩……53
進行シート：林　真智子……56

Ⅰ．令和６年度公共ホール邦楽活性化事業の概要

令和６年度公共ホール邦楽活性化事業　実施概要

１　趣　旨

公共ホールの活性化と地域における芸術活動を担う人材の育成及び環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、市町村等との共催により、公共ホール等を拠点とした、邦楽演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

２　対象団体

市町村（特別区及び政令指定都市含む）及び市町村の設置する公の施設の管理を行う指定管理者等。

３　事業内容

（１）研修事業

①全体研修会

実施団体の担当者を対象に、邦楽事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を実施した。

②個別研修

担当コーディネーターが現地での事前打合せや会場下見を実施、事業の円滑な実施のための助言を行った。

（２）公演事業

①地域交流プログラム（アクティビティ）

学校等でのアウトリーチ（ミニコンサート）など、地域との交流をはかる事業を原則として４回（１日につき２回）実施。

②ホールプログラム

公共ホール等において邦楽コンサートまたはワークショップを実施（原則として１回）。
なお、コンサートは有料公演とし、入場料収入は実施団体に帰属する。

４　経費負担

（１）一般財団法人地域創造が負担する経費

①演奏家派遣に係る経費

出演料、現地移動費を除く交通費・宿泊費等、派遣に係る保険料、楽器運搬費（現地運搬費を除く）。

②コーディネーター派遣に係る経費

謝金、現地移動費を除く交通費・宿泊費等、派遣に係る保険料。

③地域交流プログラム負担金

実施市町村が支出した地域交流プログラムに係る経費のうち、楽器運搬費およびこれに準ずるものとして特に地域創造が認めたもの。（限度額10万円）

（２）実施団体が負担する経費

一般財団法人地域創造が負担する経費以外の経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など）。

令和６年度公共ホール邦楽活性化事業　事業体制・実施日程

■事業体制

令和６・７年度登録演奏家	安嶋　三保子（箏、三絃、十七絃）	
	森　梓紗（箏、三絃、十七絃）	
	大萩　康喜（尺八）	
チーフコーディネーター	児玉　真（一般財団法人地域創造プロデューサー）	
コーディネーター	伊藤　由貴子（前神奈川県立音楽堂館長、前公益財団法人神奈川芸術文化財団理事）	中間市、都城市
	大久保　真利子（九州大学総合研究博物館専門研究員）	白河市
	谷垣内　和子（邦楽評論家）	益城町
	丹羽　梓（企画制作・独立研究者（学術博士））	養父市
	米澤　浩（邦楽演奏家、NPO法人日本音楽集団副代表）	名護市
サブコーディネーター	小松　淳子（公益財団法人かすがい市民文化財団　統括プロデューサー）	益城町
	林　真智子（フリー舞台芸術制作者）	都城市、名護市
	吉田　佐和子（(一社）福知山芸術文化振興会 代表理事、（株）Locatell 代表取締役社長）	白河市
アシスタント	田中　舞（一般財団法人狛江市文化振興事業団　職員）	中間市
	名取　萌音（フリーランス）	養父市

■事業実施日程　※日程順

担当地域一覧

No	都道府県	市町村	実施団体	実施会場	本番日程	登録演奏家	コーディネーター等
1	沖縄県	名護市	名護市	名護市民会館	令和６年10月 18日(金)～20日(日)	森　梓紗	米澤　浩 林　真智子
2	福岡県	中間市	公益財団法人中間市文化振興財団	なかまハーモニーホール	令和６年12月 20日(金)～22日(日)	森　梓紗	伊藤由貴子 田中　舞
3	福島県	白河市	特定非営利活動法人カルチャーネットワーク	白河市東文化センター	令和７年１月 23日(木)～25日(土)	森　梓紗	大久保真利子 吉田佐和子
4	兵庫県	養父市	養父市	養父市立おおやホール	令和７年１月 23日(木)～25日(土)	安嶋三保子	丹羽　梓 名取　萌音
5	熊本県	益城町	益城文化会館管理運営共同企業体　代表　九州総合サービス株式会社	益城町文化会館	令和７年２月 14日(金)～16日(日)	安嶋三保子	谷垣内和子 小松　淳子
6	宮崎県	都城市	都城市文化振興財団・舞台事業組合共同事業体　代表団体　公益財団法人都城市文化振興財団	都城市総合文化ホール	令和７年３月 ７日(金)～９日(日)	大萩　康喜	伊藤由貴子 林　真智子

令和６年度公共ホール邦楽活性化事業　全体研修会実施概要

1　概要　　令和６年度の実施団体担当者を対象とした全体研修会を実施。1日目は当事業の基本的な考え方などのゼミを、２日目はゼミに加えて令和６・７年度登録演奏家による演奏とトークのプレゼンテーションを、３日目はグループに分かれて企画検討及び発表を実施した。

2　参加者　令和６年度実施団体担当者

3　日程　　令和６年５月15日（水）、16日（木）、17日（金）

4　会場　　５月15日・17日：一般財団法人地域創造 会議室
　　５月16日：文京シビックホール 会議室・多目的室

5　全体研修会スケジュール

月日	会場	内　容	
5月15日	地域創造 会議室	14:00 ～ 14:10	開会・地域創造挨拶・参加者紹介（10分）
		14:10 ～ 15:40	①演劇ワークショップ（90分） 【福田修志（地域創造リージョナルシアター事業派遣アーティスト）】
			休憩（20分）
		16:00 ～ 16:30	②事業概要説明（30分） 【地域創造】
			休憩（5分）
		16:35 ～ 17:20	③アウトリーチ概論（45分） 【児玉真／チーフコーディネーター】
			休憩（10分）
		17:30 ～ 18:15	④邦楽のいろは（45分） 【谷垣内和子（コーディネーター）】
5月16日	文京シビックホール 会議室・多目的室	9:45 ～ 10:30	⑤公共ホールにとっての邦楽事業とは（45分） 【伊藤由貴子（コーディネーター）】
			休憩（5分）
		10:35 ～ 11:35	⑥市町村事例と邦楽公演の制作について（60分） 【米澤浩（コーディネーター）、大浦淳子（三田市総合文化センター）】
			休憩（10分）
		11:45 ～ 12:30	⑦グループワーク（地域について）（45分）
			昼休憩・移動（60分）
		13:30 ～ 15:00	⑧令和６・７年度登録演奏家プレゼンテーション 大萩　康喜（尺八） 森　梓紗（箏、三絃、十七絃） 安嶋　三保子（箏、三絃、十七絃）
			休憩（5分）
		15:05 ～ 15:35	⑨グループワーク（プレゼン感想）（30分）
			休憩（10分）
		15:45 ～ 17:15	⑩実施団体によるプレゼンテーション （１団体10分×６団体）
			休憩（15分）
		17:30 ～ 18:30	交流会（60分）
5月17日	地域創造 会議室	10:00 ～ 12:00	⑪グループ別企画検討（120分）
			休憩・昼食（60分）
		13:00 ～ 14:30	⑫企画発表～フィードバック（90分）
		14:30 ～ 14:40	事務連絡（10分）
		14:40 ～ 14:50	閉会・地域創造挨拶（10分）

チーフコーディネーター
児玉　真

地域創造の邦楽活性化事業の目標は大きく二つあると思う。

一つは、邦楽事業の企画制作に慣れていない公共ホールの人に、他の音楽事業と似たように考えるべきこともあると同時に、邦楽独特の習慣というかルールがある、ということを経験し慣れていってもらいたい。そしてそれを楽しんでもらいたいということ。

もう一つは、企画をする人、アーチストの双方にとって、ホール事業として一緒に邦楽のアウトリーチのプログラムづくりを経験することで、邦楽分野のアーチストが地域の様々なコミュニティとの関係を作り、それぞれが世界を拡大するきっかけとなる、という喜びを感じてほしいこと。

アウトリーチを始めた頃はアメリカの事例に学ぶところが多かったが、その黎明期の90年代後半にある人が言ったコメントが印象深い。「世の中にはこんなに音楽が溢れているのになぜ芸術施設から外に出て届けなければいけないのか」という議論に、「私たちが届けるべき音楽は、例えばビタミンのようなものだ。世の中には私たちが欲しくなるような甘くて美味しいお菓子とかがいっぱいある。でも、そういうものばかり食べているときっと病気になってしまう」。確かに、食べたくなるような美味しいものでなくても、人間の健康に大切なものがたくさんある。音楽も好きなものだけ聴いていればよいというものでもない。だからビタミンを届ける、という意識は大事だと思う。当然、邦楽分野にも独特のビタミンがある。本来、それに一番気付いている人は常に真剣勝負をしているアーチストということになる。

アウトリーチの届け先には、聴きたいけれど様々な理由で聴けない人だけでなく、その音楽が（精神の）健康に必要なものだとまだ気付いていない人たちも含まれる、ということになる。逆にいうと、本人が気付いていなくても役立てるように、工夫をして体験をしてもらい気付きを得ることが大切だということだ。そのために、提供者であるホールの企画者とアーチストが、訪問する場所とそこで生活する人たちの気持ちに共感しつつ、アーチストが追求してきたビタミンを結びつける努力をする。それは結局アーチストにとっても企画者にとっても嬉しい経験になるのだ、というのが経験的な結論と言えなくもない。

コンサートでも地域資源とコンサート内容をどう結びつけて企画の中に入れていくのか、というのはその地域の外から来たアーチストが可能な範囲で取り組む課題になると思う。地域資源とは、地域で生活する人の拠り所であったり、精神に影響を与えている様々な行事や習慣だったり、その地域の風土だったりする。それを、アーチストの鍛えられた音楽的ノウハウによって再構成され演奏という形で新しい表現にしていくのはやはり喜びであろうと思う。

邦楽活性化事業では、それらをアーチストがより積極的に取り込むようになってほしい（大変な作業であろうとは思うが）というのがねがいである。

邦楽活性化事業は数年前に市町村の会館を中心に実施するようになった。そのため、それまでの学校中心から、よりコミュニティに密着した行き先に活動の場が拡がってきた。今年度見に行った２ヶ所では、１年目ということもあり、慣れぬことゆえの戸惑いのようなものがアーチスト側に感じられた場面もあったが、回を進めるごとにそのやり方を獲得していったように見える。アーチストは目標に気が付けば能力は高い。２年目が楽しみである。

今年度の参加館の担当者の方たちは、様々な地域コミュニティの課題などと向き合って、企画をされることが多かったように感じるが、芸術がコミュニティの課題をすぐに解決するようなものではなく、地域の課題にさりげなく寄り添い、関わっていくことで（トリートメント＝手入れのようなもの）緩やかに変わっていくような、長い視野で付き合っていって、その中から今後のコミュニティ事業の方向性を見出して行ってくれると嬉しい。

Ⅱ. 令和６年度公共ホール邦楽活性化事業報告

実施団体：白河市東文化センター （指定管理者　特定非営利活動法人カルチャーネットワーク）
実施時期：令和７年１月23日（木）～令和７年１月25日（土）
出演アーティスト：森　梓紗（箏・二十絃）　東田　はる奈（笙）

アクティビティ

タイトル：新校舎新築プレイベント 「箏と笙の縁結び」ミニコンサート
期　　日：令和７年１月23日　13：40 ～ 14：20
会　　場：浅川町立浅川中学校　３Ｆフリースペース
参 加 者：１年生52名

新しい校舎である事から記憶に残る内容としたい事。また、白河市以外であり、当法人としては営業範囲外の地域であるが、当館が設置されている地域に隣接する町であることから、地域間交流のきっかけとする事を目的とした。

結果、当該の自治体や学校単独では、なかなか計画する事が出来ない本物の邦楽（音楽）に触れる機会となった。特に、森さんからのご提案で「夢」や「憧れ」をテーマにしていただけたことで､「鳥のように」の演奏では、生徒たちのキラキラした眼差しが印象的であった。

タイトル：「箏と笙の縁結び」ミニコンサート
期　　日：令和７年１月23日　18：00 ～ 18：40
会　　場：白河市東文化センター　エントランス
参 加 者：ひがし商工会等関係者　31名

日頃から当館運営にご協力をいただいているひがし商工会及び周辺地域の他商工会関係者に邦楽（演奏者）を知っていただく事は勿論、当館の取組を知っていただく事を目的とした。

終了後、参加者から「本物の音楽」の「生の音色」は、地域活性化の“大きな切り札となる”とのお言葉を得られ、当館事業へのご理解をいただけたとともに、ホール公演時にもご家族連れでご来場いただき、運営にも多くの関係者によるご支援をいただける結果となった。

タイトル：「箏と笙の縁結び」ミニコンサート
期　　日：令和７年１月24日　10：30 ～ 11：10
会　　場：白河市役所表郷庁舎　１Ｆホール
参 加 者：白河市立表郷小学校　①６年生36名　②市職員８名
　　計44名

白河市役所表郷庁舎の１Ｆホールの利活用が課題となっており、地域的な交流を含めた“きっかけ”づくりとしたい事。また地域の子どもたちに邦楽への興味を抱ける機会とすることを目的とした。

森さんの温かな会話からスタートし、箏演奏の指使い、２Ｆから笙を演奏しながらの東田さん登場と、お二人に子ども達の心が引き込まれていく様子が感じ取られた。また、ホール利活用を担当していた市職員が演奏中に思わず涙を浮かべていた姿があった。

タイトル：小野田小150周年記念プロジェクト「邦楽出前授業」
期　　日：令和７年１月24日　13：20 ～ 14：10
会　　場：白河市立小野田小学校　２Ｆ フリースペース
参 加 者：①３，４，５，６年生＝42名　②１，２年生＝11名　計53名

今年度創立150周年を迎える小野田小学校であり、記憶に残る機会とする事。また、授業に大正琴を取り入れていることから邦楽に関心がある環境である為、邦楽（音楽）を子供たちの心に届けることを目的とした。結果、本物の邦楽（音楽）を聴く・触れる機会となり、新たな発見の場となった。

また、普段から活発な子どもが、程よい緊張感のもと、間近で箏と笙の音色を奏でる演奏者お二人に、真剣な眼差しを送る姿が印象的であった。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：出会う縁、こころ結ぶ 「箏と笙の縁結び」
期　　日：令和７年１月25日　13：30 ～ 15：10
会　　場：白河市東文化センター　ホール
参 加 者：320名

邦楽を体験し身近に感じ触れていただく事、そして当館は勿論、白河市東地域に関心を持っていただけるような機会とする事を目的とした。

①誰もが楽しめる
②気楽に会場に足を運べる
③地域をこえてつながる

当日の公演は、予定数のチケットを完売し、満席という嬉しい結果となった。多くのお客様との“ご縁”が繋がり、演奏者お二人の新しい箏と笙の表現や力強さ、記憶に残る音色は、お客様との心を結ぶ、まさに“縁結び”となった。

ホール担当者の意見・評価
白河市東文化センター　金澤　真人

①　応募の動機・事業のねらい

当館は、市内は元より周辺市町村においての認知度が低く、また文化センターとしての存在価値が問われている状況にある。従い、これまで当館を利用した事が無い方、かつて利用した事がある方などに“振り向いて頂く”べく、文化センターとしての存在価値を示すような再生への取り組みが必要な状況にある。また当館が設置されている白河市東地域は、人口流出が懸念されており、この東地域を活性化するには、多世代にわたって白河市東地域に関わりを持って貰うことが大切であり、本事業を通して相互交流と理解を深め、“人と人の繋がり”により地域間的な活性化を図るとともに、邦楽を通して生の音楽を身近に感じ、触れることができるを目的とした。

②　企画のポイント

基本２名で運営している当館にとっては今回のような事業を行う際は、地域における協力は不可欠である。従い、これまで築いてきた地域との関係づくりや人々の出会いは“ご縁”であり、出演アーティストの森さん・東田さんも人々と出会い（ご縁）や絆（こころ）を大切にされている事から、今回事業における公演タイトルとしては正に最適なお二人であったこと。また、当館技術（柳沼）の“思い”を関係者全てに伝えることができ、全面的な協力が得られたこと。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

ａ．邦楽それも箏と笙は、“難しい”、“古い（古典的)”とのイメージが多かったこと。
ｂ．白河市以外での地域交流プログラム実施にあたり、対象自治体での同意を得る為の時間を要した。
ｃ．チラシ配布が早かった可能性や年またぎであったため､チケット販売が思うように進まなかったこと。

④　上記③をどのようにクリアしたか

ａ．若い出演者のイメージを活かし、チラシを邦楽に興味が無い方へも関心が得られるようなデザインと公演タイトルとした。
ｂ．当館利用者に偶然相談したところ、対象自治体の首長と同級生との“ご縁”があり、地域交流プログラム実施について、関心を示され即断即決いただけた。
ｃ．ひがし商工会が共催としたことで、近隣商工会特に青年部及び婦人部の販売への協力を得られたこと。また、ポスター掲示場所では、公演のアピールをしていただけた。

⑤　事業を実施しての成果

・公演後のアンケート回収率が来場者の2/3と通常の3倍以上であり、高い評価であったこともあるが、全体的（公演や地域交流プログラム）に“感動”を提供する事ができ、邦楽の魅力を伝える事ができたと考える。また、当館への認知度や期待度への向上も大きく得られつつあると考える。
・出演者より､当館と隣接の温泉館での合宿を検討していただける方向となり､次への繋がりを得られた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

当館運営上の課題だが、
ａ．全席自由としている事→当該公演のような場合、指定席の検討が必要。
ｂ．人員不足。資料提出や報告で遅れが発生しご迷惑をかけることとなった。
ｃ．地域交流プログラムの構成をコーディネーター側に任せてしまっており、ｂの課題もあるが積極的

に構成を提案・推進すべきであった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

本報告書に“提供”の言葉を使ってしまっていますが、地域住民や来場者に“与えてやっている”的な感覚になっていないか、その地域や来場者と“共に楽しむ”ことができているかを自分たちに問いかけながら事業を実施する必要があると考えます。今回、地域を越え、学校という環境を越えて分庁舎ホールでの地域交流プログラム実施など当館の色々な思いを込めて本事業を実施させて頂けたことは、当館を取り巻く課題解決の手助けとなり、当初目的の達成に繋げる事ができたと考えます。多くのご指導いただき、ありがとうございました。

コーディネーターレポート
大久保　真利子

史上に名高い白河関がある、福島県白河市の東文化センターが会場である。アーティストは森梓紗さん（箏、二十絃箏）と東田はる奈さん（笙）。アーティストにとっては2024年度３カ所目で最終となる事業だ。

現在の白河市は「平成の大合併」により白河市、表郷村、大信村、東村が合併し誕生した。東文化センターがあるのは旧東村で、市の中心には2016年に開館した白河文化交流館コミネスがある。両施設ともに指定管理するのがNPO法人カルチャーネットワークで、本事業を担当くださったのは金澤真人さんと柳沼良平さんである。

■本番まで

金澤さんと柳沼さんが本事業にかける思いは、東文化センターの認知度アップと独自性の創出だ。コミネスとの差別化をはかり、白河市東部地域を中心とした集客と地域コミュニティを集約するために、「ひがしを向いた事業」ということがキーワードになった。

その立役者のひとり（？）となったのが、ひがし文化センターのキャラクター「きつねっこん」である。柳沼さんの発案で広報物として作成したチラシやポスターに、きつねを想起させるパーツがあしらわれた。また下見の際に作成した森さん出演によるメッセージ動画では「きつねっこん」を模したキツネのぬいぐるみとの“共演”が実現した。動画は東文化センターのHPやSNSで配信したほか、東文化センターに隣接する温泉館やコミネスのロビーでも連日再生された。今後も広報活動などにおいてこのような総合的なイメージ戦略を積み重ねることで、東文化センターの認知度アップに繋がることを願いたい。

また本番実施の１月は積雪や道路凍結で交通状況の悪化が見込まれることから、移動など十分に余裕をもったタイムスケジュールをご提案いただいた。ただ本番は連日快晴！積雪もほとんどみられず天候を心配することなく進めることができた。

■アウトリーチ

「ひがしを向いた事業」という思いは、アウトリーチのさまざまな場面でも散りばめられた。アウトリーチは小学校２校、中学校１校、ひがし商工会のメンバー向けという合計４回である。そのうち地域資源の活用というビジョンを含んだアウトリーチが２回あった。ひとつめは表郷小学校の６年生で、白河市役所表郷庁舎に招待した。同庁ロビーは吹き抜けになっていて十分な広さがある贅沢な空間だ。行政手続きに来庁するだけでなく、市民が集う催しなどもできることを知ってもらうことが目的だ。そこで当日は職員や来庁者も児童の目線に入り込まない場所で鑑賞してもらうなどの仕掛けをつくった。ふたつめは、ひがし商工会メンバー向けのアウトリーチで、東文化センターのロビーで実施した。商工会のメンバーの多くは東文化センターでのイベントの運営やボランティアとして活動していただいている方が多くホールのロビーは見慣れた場所だと思うが、照明や小上がりなどを設営し非日常空間でアウトリーチを体験してもらった。公共ホールは地域住民の文化拠点だといわれる。ホール以外の場所も自由に活用するアイディアは他事業の参考にもなりそうだ。またアウトリーチの終曲《泡沫（うたかた）リバース》では、MCだけでは思い起こしづらい「泡沫」の文字を、ひがし商工会青年部の方に揮毫してもらい、すべてのアウトリーチにて活用させてもらうなど人的な繋がりの創出もあった。

あと２カ所のアウトリーチについても簡単に紹介しよう。浅川中学校（福島県石川郡浅川町）は、行政区が異なるものの東文化センターへの集客が見込める地域にある。これまでほとんど繋がりが無い地域での実施は、人脈づくりからはじめなければならずとてもチャレンジングだったという。はからずも

新校舎に移転して早々の実施だったのだが、最後の質問コーナーでは中学生らしく、アウトリーチをとおして社会事象や流行、教科との結びつきを感じていることを実感した時間でもあった。

また小野田小学校は2024年に創立150年を迎える伝統ある小学校で、全校生徒が53人という小規模校だ。アウトリーチそのものは３～６年生が対象だったが、せっかくなら１～２年生にも箏の音色を聴いて欲しいとの森さんの思いから、アウトリーチ本番前にミニコンサートの場を設けた。立ったまま箏の周りを取り囲んでもらい10分足らずの短い時間だったが、児童のキラキラしたまなざしが印象的であった。

■ホール公演

最終日のホール公演は、開場の１時間前には徐々に人が集まりはじめるなか、ほぼ満席で幕を開けた。

ホール公演には「箏と笙の縁結び」というタイトルが付けられた。幾度かのZoomミーティングや下見などを重ねるなかで、箏と笙という同じ舞台ではあまり同時に演奏することのない楽器同士の組合わせ、東文化センターとアーティスト、また東文化センターと来場者など、とても多くのご縁のもとに音楽が届けられるという意味が込められた。

第一部は、森さんは着物、東田さんは雅楽の伝統的な装束という和の装いで、古典曲を中心としたプログラムである。箏独奏《みだれ》ではじまり、古典曲の合奏《出会い・時を超えて》、笙独奏《盤渉調調子（ばんしきちょう）》、箏独奏《楽（がく）》で前半を終えた。２曲目の《出会い・時を超えて》で笙の東田さんが客席後方から歩いて入場する際には、客席から舞台までの“光の道”がつくられた。これは５月の全体研修会の時から柳沼さんがあたためてきたプランで、幻想的で感慨深い瞬間であった。

また第二部は洋装にチェンジして、照明での演出も加えた華やかな雰囲気のなかで、合奏の魅力を存分に味わってもらうプログラムだ。《星幻譜》と《芽生え》では二十絃箏を使用し、MCでは森さんと二十絃箏との出会いも紹介した。そしてホール公演でも彼女たちの代名詞ともいえる曲《泡沫リバース》の全曲演奏にて幕を閉じた。MCではアウトリーチの様子を紹介するとともに、下見から体験・体感してきた「ひがし」のネタを中心に展開した。

邦楽においてはとくに箏の転換を邦楽器屋さんに依頼することが多いが、アーティストの了解を得たうえで、今回はホールスタッフが担当した。邦楽器を扱うのは初めてだということだったため、できるだけアウトリーチから同行いただき楽器に触れる機会を多く作ってもらうことで、関係者全員が安心できる本番となった。

■まとめにかえて

全体をとおして「ひがしを向いた事業」という目標は、地域の方々の支えと金澤さんの地域人脈の広さをフル活用していただくことによりある程度達成できたように思う。それは白河市民や担当者にとっては地元としての魅力の再発見や再確認であろうし、地域創造サイドとしては地域に根ざした文化的な特色やコミュニティの在り方をできる限り感じ取ることに懸命になった時間であった。

とりわけアーティストにとっては地域の特性を意識したプログラムづくりや観客との間の取り方を再認識するきっかけになったのではないだろうか。私自身も主催者・対象者・アーティスト、それぞれの目的や願いを踏まえてこのトライアングルをどのような色や形にするのかをことばを尽くして話合い、チーム全員で何度も共有していくことの大切さを痛感した機会でもあった。本事業において東文化センターらしさの創出のお手伝いができたとしたら幸いだ。

アウトリーチ進行シート（福島県　白河市）
吉田　佐和子（サブコーディネーター）

実施日	令和７年１月24日
実施先	白河市立小野田小学校
対象・実施先の情報	今年度、創立150周年を迎える。対象は小学３～６年生。授業に大正琴を取り入れている為、比較的邦楽に馴染みやすい環境である。
出演者（編成）	森梓紗（箏）、東田はる奈（笙）
ねらい／目標	邦楽の世界を体感してもらうとともに、演奏者が楽器を始めた経緯なども紹介することで、キャリア教育の一端を担うことを目指す。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：01	・呼び込み ・入場	白河市東文化センターの金澤さんの呼び込みで、森さんが入場	
0：30	楽曲演奏（1：00）	M1「鳥のように」森　（箏）	
1：30	MC①（7：45）	◆自己紹介 小野田小学校３、４、５、６年生皆さんこんにちは。今日はこの楽器と共に東京からやってきました。 この楽器はお箏という名前です。このお箏の演奏家、森　梓紗と言います。よろしくお願いいたします。 みんな手が見えるように、きゅっと真ん中で集まってください。（生徒移動） ◆楽器紹介 最初に質問します。お箏の生演奏、今日が初めてという人？（生徒：初めて！） では､質問です！右手に爪をはめているが右手の何指にはめてるでしょう ？（生徒：反応あり） 親指、人差し指、中指、薬指はない・・・小指はないですね、３個つけている爪で色んな音を出すことができます みんな この曲知ってるかな？（演奏：さくらさくら） ◆弾き方紹介 今何指使っていた？親指だね、みんなも弾く真似してみてください。 今親指使ってたので、今度は人差し指と中指をこんにちはって動かしてみて。できる？こうやってやると～？（音を鳴らす） もっと華やかな音を出したい時は、ここのたくさんの糸を行ったり来たりします。 ではみんなに質問です！反対側弾くとどうなると思う？まずこっち弾くよ（音）覚えたね、次は反対側、右側ねいくよ（音） 音が違うのわかったかな？みんなから見て左は音がきれいに並ぶけど、右側は音がバラバラ。そして低い音が出ます。 ◆楽器紹介 そして、お箏にはすごいことがあります、この道具は取り外せます。 箏の柱と書いて琴柱といいます。箏柱を付け替えたり、動かしたりします。 聞いていてね。（音）（生徒：驚いた反応） ということで、柱を動かすと音が変わったりします。自由自在に並び替えることができます。親指の音、いろいろな指を使ってという技を使って、かっこいいさくらさくらを弾いてみたいと思います。	生徒中央に集まる MC：森
9：15	演奏（1：30）	M1「さくらさくら」森　（箏）	
10：45	MC②（3：40）	お箏は 、親指・人差し指・中指 に爪をはめているんだけれど、これだけではなくて、薬指・小指、左手もいっぱい動いてたよ、見えたかな？ 色んなところを使いながら色んな音を出すことができます。それが、私が一番お琴を素敵と思うポイントです。 ◆箏との出会い ３、４年生の子いるかな？５、６年生は？私がお箏を習い始めたのは４年生くらいでした。 ５年生、６年生ぐらいの時に私が初めて出会ったお箏の曲があります。それはお母さんが弾いてた曲で、それがすごく好きで憧れて、こんな曲弾きたいなと思って、演奏家として一生懸命練習するようになりました 。 今日はみんな集まってくれたので、その憧れた曲をみんなにプレゼントしたいと思って、練習し準備してきました。 まずはお箏の音の並びを変えてみたいと思います。さくらの音弾いてみます。これを変えてみます。（箏柱を変える）音が変わったのわかった？今から弾く聞く曲、何かをみんなの頭の中で この今から弾く曲を聞いてどんなもの 思い浮かぶ かなって ちょっと色々と想像してほしいなと思います。 例えば 景色・季節・色・感情・生き物・乗り物など、これから聞く曲を聞いてどんなものが思い浮かぶかなって思いながら聴いてみてください。	MC：森
14：25	演奏（4：10）	M2「鳥のように」森　（箏）	
18：35	MC③（4：20）	◆感想の共有 みんなすごい集中しすぎてくれたね。ありがとう。みんなが一生懸命聞いてくれたから私もドキドキしました。では、聞いてみようかな。どんなことを感じましたか？ 生徒：春っぽいなと思った。 森：季節を感じてくれた？ありがとう、素敵。 生徒：熱情を感じました。 森：嬉しい！熱いものを感じてくれたのね。 生徒：音が小さくて寂しい時と大きくてきれいな時とあった。 森：ありがとう、音が小さい時は寂しく感じたんだね。みんな色々だね。後はいいかな？私も初めて聞いたとき、いろんなことが想像できるなと思って、素敵なことだなって思ったんだよね。お箏の曲で色んなことを想像できるなって思うと､この曲の力を感じるよね。この曲を書いた人は､この曲に｢鳥のように｣っていうタイトルをつけました。鳥が飛んでいる様子や色々なところを飛んでいるということを考えながら作ったようです。みんなも色んな想像をしてくれたことを嬉しいなと思いました。 そして、綺麗な音を聞いてもらったんだけど、私は音楽をやっていく中で、すごく素敵な仲間に会いました。お箏以外の別の楽器の人ともいっぱい仲間ができたました。その中でも本当に素敵だなーって思う音に出会うことができました。今日はね、どこかから音が聴こえてきますので、みんな耳を澄ましてみてください。	MC：森
23：15	演奏（3：15）	M3「盤渉調調子」東田はる奈（笙）	演奏しながら登場

26：30	MC④（6：45）	◆自己紹介・楽器紹介 笙を演奏しています、東田はる奈です。 皆さんこんにちは。 じゃあみんな聞いてみようかな。 笙を初めて見た人！（生徒：はーい） ＜笙の説明＞ もしかしたら中学校に入って勉強するかもしれないんだけれども、この楽器ってとても古い歴史があります。千年くらいの歴史。その時からずっと伝わっている、雅楽っていう音楽で使われる楽器です。 笙って１文字の漢字を書くのだけどわかるかな？？竹冠に生きるっていう、一文字の漢字です。その竹冠の名のとおり、竹でできています。細い17本の竹、円を描くようにできています。 これをみんなに見て欲しいんだけどこの楽器とても綺麗な絵が描いてあるの見える？さっきのお琴の曲と同じく、ここに２匹の鳥が書いてあります。 この鳥なんだけど、皆さん伝説の鳥、鳳凰を真似して作ったといわれています。そういわれると鳥の羽みたいに見えてくるよね。 ＜曲解説・楽器紹介＞ さっき静かに聞いてくれた曲は「盤渉調調子」って難しいタイトルなんだけど、千年以上伝わっている、冬の曲です。 息使って吹く楽器ってやったことある？笙はずっと音が続いていたと思います。吹いてみるね、（音）次、吸ってみます（音）そう、ハーモニカみたいにずっと音を鳴らし続けることができる楽器です。 ここに、これ見える？（保温機の上で）この上でくるくるって回すのです、この楽器は繊細なので、冷たくなると音が出なくなるので、くるくる回しながら温めて演奏します。	MC：東田 箏の前に立ち、生徒たちに見えやすい位置で説明
33：15	MC⑤（10：15）	森：笙の音は素敵なのでお箏と一緒に演奏できないかな？と思ったんですが、ほとんど曲がありません。笙は、平安時代に活躍している。お琴は江戸時代なんです。 活躍した時代が違ったので一緒の曲がなかったんです。 生徒：作曲家だったら作れる？ 森：よく知ってるね！今日最後に聴いてもらいたい曲は、作曲家に箏と笙の曲を書いてくださいって頼んで新しく作ってもらった曲をみんなに聴いてもらいます。これまでお箏と笙で色んな音を聴いてもらったんだけど、これから今までになかった音が出てきます。なので、それをまずみんなに聴いてもらいたいと思います。 笙演奏 東田:さっきの音は「トゥクトゥク」というように発音して音を鳴らしています。 (真似をする生徒たち) 森:じゃあ次はお箏の番です。お箏の音も一回弾くから想像してみて。(目を瞑って聴いてもらう) どんな風に弾いてたか分かるかな？ 生徒：走るように弾いてる！親指と中指で弾いてる！（色んな意見が飛び交う） 森:じゃあどんな風に弾いていたか種明かしをするので、交互に見に来て。（３、４年生・５、６年生交代で箏の周りで立って見る、演奏を聴く） ◆曲紹介 今から最後の曲なんだけど 次の曲タイトルは、ちょっと難しい感じなの。難しい言葉なんだけど泡沫リバースという曲です。 どういう意味か想像してみて。水の上に泡があるよね 。物事がはかなく消えてしまう 、何か出来事とか起こったことがすぐに消えてしまう様子を泡沫って言うのね。 すぐに消えてしまうっていう様子を思い浮かべながら、後は今 みんなに見てもらったいろんな音を使って演奏しますので どんな色や景色が思い浮かぶかな。泡沫リバースをお聞きください。	MC：森 お箏を学年ごとに見に行く間、待っている児童に笙の紹介をする
43：25	演奏（4：20）	M4「泡沫リバース」森 （箏）東田はる奈（笙）	
47：45	挨拶・退出	今日はありがとうございました。	演奏者退場

実施団体：兵庫県養父市
実施時期：令和７年１月23日（木）～令和７年１月25日（土）
出演アーティスト：安嶋　三保子（箏・十七絃）　田辺　恵山（尺八）

アクティビティ

タイトル：箏と尺八わくわくミニコンサートin大屋中学校
期　　日：令和７年１月23日　10：40 ～ 11：30
会　　場：養父市立大屋中学校　音楽室
参 加 者：23名（１年生　19名、 教職員　４名）

中学生という多感な時期であることから、生徒たちの反応が気がかりだったが、田辺さんが尺八で「情熱大陸」を演奏しながら登場するという印象的な演出と安嶋さんと息の合った演奏により、生徒たちの心をつかんでスタートすることができた。

演奏の合間には、楽曲の解説や、箏と十七絃の音の違い、尺八の息の使い方による音の変化などを分かりやすく説明。さらに、二人が楽器を始めたきっかけや、継続して練習することの大切さなどについて語る場面もあり、生徒たちは真剣に耳を傾けていた。

コンサート終了後には、演奏者に質問する姿や興味深そうに箏を間近で観察する姿が見られるなど、和楽器に対する関心が高まったことが伺えた。

タイトル：箏と尺八わくわくミニコンサートin大屋小学校
期　　日：令和７年１月23日　13：25 ～ 14：10
会　　場：養父市立大屋小学校　音楽室
参 加 者:39名（４年生　14名、 ５年生　21名、 教職員　４名）

中学校と同様のプログラムで実施。中学校より人数が多く、３列での鑑賞となったが、迫力のある演奏と丁寧な曲の解説により、後列の児童も最後まで集中して楽しんでいる様子が見られた。

また、普段間近で見ることの少ない楽器の特徴や演奏方法の詳しい説明に、児童たちは興味深そうに耳を傾けていた。演奏が始まると、その豊かな音色に自然と引き込まれ、静かに聴き入る姿が印象的だった。

コンサート後の児童の感想には「上弦の月では大きな月が想像できた」「鹿の遠音では２頭の鹿が鳴く様子が浮かんできた」といった声があり、それぞれが演奏を通じてさまざまな情景を思い浮かべながら聴いていたことが伝わってきて、音楽を通じて児童の豊かな感性を磨く良い時間となった。

タイトル：箏と尺八わくわくミニコンサートin大屋ふれあいの家
期　　日：令和７年１月24日　10：30 ～ 11：20
会　　場：大屋ふれあいの家
参 加 者：猫の手くらぶ支援員、利用者　合計38名

猫の手くらぶ支援員から利用者に声かけを行ってもらい参加者を集めた。

３回目のアクティビティということもあり、MCもリラックスした様子で参加者とコミュニケーションを取りながら和やかな雰囲気で進行していた。

参加者のなかに、奥様を亡くしてから自宅に引きこもりがちに

なっていた男性も参加しており、コンサート終了後には演者に竹細工の壁飾りを手渡して「今日を境に引きこもるのはやめる」と話していた。音楽の力が、心の傷を癒し前向きな一歩を踏み出すきっかけになることを実感した。アクティビティが地域のつながりを深め、人々の心に寄り添う貴重な機会となった。

タイトル：箏と尺八わくわくミニコンサートin琴弾の丘
期　　日：令和７年１月24日　14：00 ～ 14：50
会　　場：障害者支援施設　琴弾の丘
参 加 者：琴弾の丘利用者、職員　合計40名

じっとして聴くことが難しい方が多く、開始前から利用者の方は立ち上がったり、声をあげたりしていたため、スムーズな進行と集中力を保つことが難しい環境だったが、丁寧で温かみのあるトークと迫力のある生演奏を披露してくれた。その様子が、利用者の皆さんの興味を引きつけ、自然と演奏に耳を傾ける姿が見られた。

プログラムには、施設で日頃から練習している曲を取り入れ、演奏に合わせて職員や利用者の皆さんが一緒に踊るなど一体感のある時間を過ごした。また、馴染みのあるメロディーが流れることで、利用者の方の表情も一段と明るくなっていた。

身体を動かしながら楽しめる参加型のアクティビティで、満足度の高いものとなった。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：箏と尺八が奏でる　かいこのまちの懐古の響き
期　　日：令和７年１月25日　14：00 ～ 15：30
会　　場：養父市立おおやホール
参 加 者：98名

日本の伝統楽器である箏と尺八による多彩な楽曲が披露された。古典的な名曲から、現代的なアレンジが施された作品まで幅広い選曲で、伝統と革新が融合した奥深い世界を堪能できる内容のプログラムであった。

演奏の合間には、曲紹介のほか、箏の指遣いや奏法の違い、尺八の音色の変化についての詳しい解説を行った。箏の糸を弾く指の動きひとつで音色が変わることや、尺八の息遣いによって多彩な表情が生まれることなど、楽器の魅力や奥深さを知ることができる内容で、邦楽を初めて聴く方にも分かりやすく伝わる工夫がされていた。

前日のアクティビティで訪れた猫の手くらぶの利用者も当日来場されていた。

日本の伝統音楽の持つ繊細な美しさと力強さ、その表現の幅広さを存分に感じられるひとときとなり、観客の心に深く響く公演となった。

ホール担当者の意見・評価
市民生活部まちづくり文化交流課　北山　佳奈

①　応募の動機・事業のねらい

本市ではこれまで､邦楽分野のアクティビティを含む本格的なコンサートを実施したことがないため、子どもから高齢者まで幅広い年代の人々に和楽器の魅力を伝える機会を創出することで、邦楽への関心を高め、その裾野を広げる。

また、事業の運営を通じて基礎的な実務を学び、企画力や運営スキルを向上させることで、今後の文化事業の発展にも寄与することを目指す。

②　企画のポイント

本公演は、幅広い年代の人々が和楽器に興味や親しみを持てるよう、初心者でも気軽に楽しめる内容とする。邦楽の繊細な音色から迫力ある響きまで、五感を使ってダイレクトにその魅力を感じられる構成とし、演奏をただ聴くだけでなく、体験を通じて邦楽の奥深さを実感できるよう工夫する。

アクティビティは､ホールへ足を運ぶことが難しい人にも本格的な邦楽の演奏を届ける機会を創出し、より多くの人に邦楽の魅力を伝えていく。観客が一節を一緒に歌ったり、手拍子や足踏みを取り入れたりすることで、演奏者と参加者が一体となって楽しめる内容とする。

演奏プログラムは、箏や尺八などの伝統的な和楽器の響きを感じられる楽曲から、親しみやすい現代曲まで幅広く取り入れ、邦楽に対する「敷居が高い」「堅苦しい」といったイメージを払拭する。これにより、邦楽に初めて触れる人でも気軽に楽しめる公演を目指した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

異動してすぐに担当することになった事業だったため、最初は何もかもが手探りの状態だった。業界特有の用語や企画の進め方、どのような流れで準備を進めていけばよいのかなど、基本的なことすら分からず、不安を抱えながらのスタートとなった。

特に、公演のタイトルや企画の方向性を決める段階では、どのようなコンセプトで進めるべきか頭を悩ませた。

また、前年度の引継ぎの際、市がおんかつ事業を実施した際に集客に苦労したという話を聞いていたため､今回の公演でも同様の課題が懸念された。どうすればより多くの人に興味を持ってもらえるのか、どのように情報発信をすれば効果的なのか、広報戦略についても頭を悩ませた。

④　上記③をどのようにクリアしたか

私の経験がないということを踏まえて、第１回目の会議を早めに開いていただき、事業の組み立て方やアウトリーチ先の選定方法、周知についての助言してもらいながら進めることができた。

アウトリーチ選定には、YBアクト（芸術監督をはじめ、学識経験者や市民代表で構成し、本市の鑑賞事業等を企画する組織）の大屋地域の市民メンバーに相談しながら決定した。

集客に関しては、多くの人に情報を見てもらえるよう、様々な媒体を用いた早めの周知を心掛けた。また、コーディネーターの丹羽さんにアドバイスをいただき、周知が年をまたぐため、皆さんに忘れられないよう、年始にあらためてケーブルテレビでの放送を行うなど対策を行った。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティを通じてプロの演奏を間近で聴くことで、音楽が持つ癒しや活力を与える力を実感した。また、市が推進する「社会的処方」の観点からも、音楽が心の健康やコミュニティのつながりを促

進する一助となったと感じる。

さらに、ミニコンサートに参加された方々の中には、その後ホール公演にも足を運んでくださった方がおり、ホールに足を運ぶきっかけにもなった。

コンサート終了後には、「素晴らしかった」「また開催してほしい」との声を多数いただき、アンケート結果からも高い満足度が確認され、邦楽の魅力に触れる人が増え、新たなファンの創出にもつながったと感じている。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回の公演では、経験不足のため至らない点が多かったが、コーディネーターの丹羽さん、アシスタントの名取さん、地域創造の内田さん、そして演奏家のお二人に支えてもらい、なんとか無事に終えることができた。

事業を進める中で、他の公演と時期が重なり、連絡が遅くなってしまう場面があった。チラシ作成では、余裕を持ってスケジュールを立てていたつもりだったが、確認作業に時間がかかり、結果的に入稿ギリギリになってしまった。

また、舞台スタッフがボランティアということもあり、慣れていない部分が多く、公演前日の照明確認では予想以上に時間がかかってしまった。スタッフの多くは日中仕事をしているため、リハーサルの回数を増やすのが難しいが、数日に分けて行う、Zoomなどを活用して事前に打ち合わせをするなど、より円滑に進めるための工夫が必要だと感じた。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

今回の事業を通じて、アウトリーチの魅力を改めて実感した。特に、高齢者が多く、車がないと移動が難しい本市のような地域では、ホールに足を運ぶこと自体がハードルになるため、演奏をホール内だけで完結させるのではなく、地域へ出向いて届けることの意義を強く感じた。

アウトリーチは、単に音楽を届けるだけでなく、文化を身近なものとして感じてもらう大きな役割を果たし、ホールに来られない人たちに音楽の魅力を伝えることで、新しいつながりが生まれたり、地域の人々が気軽に楽しめる機会が増えたりする。このような取り組みを継続していくことで、ホールが単なる「公演を行う場所」ではなく、地域とより深く結びついた存在になれるのではないかと感じた。

コーディネーターレポート
丹羽　梓

今回の養父市の事業を一言で表すとすれば「１年生」である。ホール担当者の北山佳奈さんは今年度まちづくり文化交流課に配属された方で、初めてのホール事業が今回の邦楽活性化事業だった。アーティストの安嶋三保子さんも今年度から登録のアーティストであり、養父市が登録アーティストとして初めて担当する市町村であった。そして筆者（丹羽）もコーディネーターとして担当する初めての市町村であり、唯一、アシスタントコーディネーターの名取萌音さんが２年目という、フレッシュなメンバーで取り組んだ事業となった。

未経験で分からないことが多いからこそ、疑問点や気がかりな点など、できる限り細かい部分まで全員で共有しながら準備を進めていった。そのおかげもあってか、アクティビティ・コンサート共にとても充実した内容で実施することができた。

今回の事業は、初めてホール担当として事業を実施する「ホール職員１年生」の方に非常に参考になるポイントが多かったと思う。そのポイントになった部分を中心に、養父市の事業をまとめてみたいと思う。

■今回の事業のテーマ

北山さんは、コンサートやアウトリーチを実施した経験はなかったが、前年度まではケーブルテレビの担当をされていたということであった。また、前年度に養父市のビバホールで実施した公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）の担当者から、コンサートの集客に苦労したという話を聞いたという。これらを踏まえて、今回の事業のテーマは「広報の可能性を探る」ということになった。北山さんの前職の経験を生かし、チラシ、ケーブルテレビ、SNSなどの媒体で計画的に広報活動を行い、どのような媒体が集客につながるかを検討し、今後のホール公演の広報活動につなげていこうということになった。

※注：養父市には、おおやホール・ビバホール・ノビアホール・やぶ市民交流広場という４つのホールがある。

■アクティビティ先を決める

事業の実施が決まると、担当者は５月に都内で行われる全体研修会に参加し、事業概要やアウトリーチの概念などについて研修を受ける。しかし、ホール職員１年生にとっては、この研修を受けただけで自分のホールで行うアクティビティ先やコンサートのコンセプトなどを考えるというのはなかなか難しいと思う。北山さんも相当悩まれたのではないだろうか。

アクティビティ先については、最初に候補として上がったのはアクティビティ先の王道である学校である。候補先の大屋小学校と大屋中学校は、どちらもホールから１km圏内にある学校で、アクティビティに参加した子ども達がコンサートに来場してくれる可能性も見込める好条件のアクティビティ先だった。アーティストの安嶋さんにとっても、まずは王道の学校でアクティビティができるのは非常にありがたい。

悩んだのはあと２箇所をどこで実施するかである。全体研修会の時、北山さんは学校の他に高齢者施設に行ってみたいと話していたが、具体的な場所は決められずにいた。そこで、北山さんに過去の邦楽活性化事業の報告書を紹介し、過去事例を参考にしていただいた。そして決まったのが、高齢者の居場所づくりや生活支援を行っている「猫の手くらぶ」という団体と、障がい者支援施設「琴弾の丘」である。この２箇所の施設の選定理由を聞いてみると、北山さんはホールに足を運べない方々に音楽を届けたいということであった。

■アクティビティ先とのやりとり

学校でアクティビティを行う場合、事前に決めたクラスでアクティビティを実施するため、参加者を集める必要はない。しかし、学校以外の場所で実施する場合、参加者が事前に決まっていないケースもある。今回の「猫の手くらぶ」は、参加者が決まっていなかった。そこで、北山さんがアクティビティ用のチラシを作成し、猫の手くらぶの担当者である藤原会長を通して利用者さんに配布していただいた。このような場合、アクティビティ先の担当者が協力的かどうかが重要なポイントになる。北山さんが藤原会長と綿密にやりとりして良好な関係性を作ってくださっていたおかげで、アクティビティには40名近くの方が集まった。

■アクティビティでの出会い

大屋小学校と大屋中学校では、動物や自然をテーマとしたプログラムを実施した。尺八の田辺さんが「鹿見たことある？」と子ども達に質問すると、みんなが大きくうなずき「すぐ近くにいるよ！」と教えてくれる子もいて、演奏者を驚かせる場面も。〈鹿の遠音〉の演奏を聴きながら、近所に住む鹿の様子を思い浮かべていた子もいたかもしれない。

猫の手くらぶのアクティビティは、猫の手くらぶが高齢者の居場所づくりのために毎月１回行っている「オレンジカフェ」の会場である「大屋ふれあいの家」という公民館で実施した。参加者の皆さんは今回のアクティビティをとても楽しみにしてくださったようで、中には着物で参加してくださった方もいた。また別の方は、奥様がご逝去されたばかりで落ち込んで家に篭っていたところ、藤原会長に声をかけてもらい参加したとのことだった。演奏を聴いて元気をもらったと話しながら手作りの竹細工のプレゼントを渡す場面では、アーティストが涙ぐむ感動のシーンとなった。

琴弾の丘では、参加者の方々が参加できるようなプログラムにしたいと考えた。そこで、施設のイベントでよく踊っているという〈虹〉をプログラムの中に入れ、アーティストの演奏で琴弾の丘の職員さんに踊ってもらうというコラボレーションを計画していた。打ち合わせでは、２、３人の職員さんが前に出て踊る予定であったが、アーティストが声をかけると10名近くの方が前に出てきてくださり、「琴弾の丘ダンサーズ」との夢のコラボレーションが実現した。

■集客だけではない広報

今回テーマとして掲げた広報で主に行ったことは、①チラシの市内全戸配布、②ケーブルテレビでの告知、③SNSでの告知であった。ケーブルテレビとSNSではアーティストによるコンサート告知動画を使用した。これらは主にコンサートの集客を目的とした広報である。その結果、客席155席に対し前売り券販売数は84枚となり、集客は非常に上手くいったと思う。これに加えて、猫の手くらぶのアクティビティ参加者がコンサートに来場する姿も見られ、アクティビティ自体もコンサートの広報につながっていた。

また、大屋中学校には地元WEB新聞の但馬新聞、琴弾の丘にはケーブルテレビの取材が入り、アクティビティの様子が地域の人々に紹介された。コンサートの集客だけでなく、公共ホールが行っている活動を地域の人々に発信することも重要な広報活動である。今回は北山さんの前職のご経験やネットワークが非常に上手く生かされた事業になったと思う。

■最後に

今回のアクティビティ先は、小学校、中学校、高齢者の団体、障がい者施設と全て異なっていたため、

ホール担当者にとってもアーティストにとってもなかなかハードだったと思う。しかし、未経験の１年生だったからこそ挑戦できた内容だったとも思う。今回の経験を糧にして(いや､必ず糧になるはず！)、今後も是非ワクワクする事業を企画してほしい。

コーディネーター１年生の私にとっても学びの多い貴重な経験となった事業だった。今回の事業に関わってくださった全ての皆様、本当にありがとうございました！

アウトリーチ進行シート（兵庫県　養父市）
名取　萌音（アシスタント）

実施日	令和７年１月24日
実施先	大屋ふれあいの家
対象・実施先の情報	養父市を中心に地域の共助、協助を目的として活動する「猫の手くらぶ」の支援員、利用者　合計38名
出演者（編成）	安嶋三保子（箏）・田辺恵山（尺八）
ねらい／目標	ホールに足を運ぶことが難しい人にも本格的な邦楽の演奏を届ける機会を作る／特別な時間の演出、懐かしさ、非日常的な体験を届ける

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	入場（１分）	「猫の手くらぶ」藤原会長の挨拶・呼び込み	舞台下手から箏、尺八、箏の順に配置（調弦のため箏２面で実施）
0：01	Ｍ１ 春の海（４分）	安嶋三保子（箏）・田辺恵山（尺八）	上手奥の控室から安嶋、田辺の順に入場し目礼で演奏スタート
0：05	MC①（４分）	・自己紹介とコンサートの趣旨について “あじちゃん”の愛称や二人が大学院時代の同期で長く一緒に演奏活動をしていることなど。“養父市は下見で食べた山椒ソフトが印象的でまた食べたい！”の一言には会場から笑い声が起こり、言葉をかけられる場面もみられた。 ・「春の海」楽曲紹介 瀬戸内の穏やかな海に訪れる新年の情景を描いた曲。観客それぞれが良い一年を過ごせるよう願いを込めて演奏した。 ・Ｍ２「雁」への導入 邦楽には生き物や自然をテーマにした曲が多くあり、渡り鳥「雁」の姿に人生の旅を重ねて作られた楽曲。	MC：安嶋→田辺 ホール用意のワイヤレスマイクを使用
0：09	Ｍ２ 雁（５分）	田辺恵山（尺八）	舞台中央で尺八を演奏 舞台下手に控えの椅子を配置
0：14	MC②（３分）	・Ｍ３「祭りの太鼓」への導入 「好きな数字はありますか？」という問いかけから、祭りの太鼓を選曲した個人的なエピソードにつなげた。	MC：安嶋
0：18	Ｍ３ 祭りの太鼓（５分）	安嶋三保子（箏）	Ｍ２終わりで交代し、田辺が控えの椅子に移動
0：23	MC３（４分）	・演奏を始めたきっかけ 「近くのお箏の先生から、娘さんが幼馴染ということもあり“一緒にやりましょうよ！”と誘われて４歳のころに始めた（安嶋）」「和楽器奏者の両親を持ちながら自分には関係ない世界と思っていたが、高校生の時、同年代の女の子が尺八を演奏する姿に感化されて試したところ一発で音が鳴ったので自分は天才かもしれないと思って始めた（田辺）」 対象的に見える二人のエピソードが大きく場の雰囲気を和ませていた。 ・Ｍ４への導入	MC：安嶋→田辺 トーク交代後に調弦
0：26	Ｍ４ 上を向いて歩こう（３分）	安嶋三保子（箏）・田辺恵山（尺八）	尺八は吹きながら前に出て手拍子を促すコミュニケーション 体がほぐれると共に小さく歌いはじめる人もいた
0：29	MC④（４分）	・Ｍ５への導入 田辺が拡大印刷された「千鳥の曲」の歌詞を掲げ、歌詞を一緒に読み進める形で解説。千鳥の“ちよちよ”という鳴き声と“千代に八千代に”大切な人の永遠を願った昔の人の心と、聴いてくださる方の健康と長寿を願う奏者の気持ちを重ねて伝えた。	MC：安嶋
0：33	Ｍ５ 千鳥の曲（６分）	安嶋三保子（箏）・田辺恵山（尺八）	演奏中はスタッフが手持ちで歌詞を掲示
0：39	MC⑤（４分）	・尺八の楽器紹介 一尺八寸の長さが基本となる竹製の楽器で、表に４つ、裏に１つの穴があり、指の押さえる範囲や息の速さや当て方、首の角度で音程を調整する。音の変え方を実演するとシンプルな楽器で正確な音程を出す難しさが伝わり、観客の間からも良い反応があった。 ・Ｍ６への導入 日本の音階はドレミの代わりに壱越・断金・平調・勝絶と名前がついており､中でも壱越は尺八の基音として一番大事にされている。「壱越」は人間国宝の山本邦山がこの音を基準に作曲した。	MC：田辺 MC中に調弦
0：43	Ｍ６ 壱越（６分）	安嶋三保子（箏）・田辺恵山（尺八）	
挨拶・退出		・お礼とホールコンサートの宣伝 十七絃や今日の楽曲の長尺版を演奏すること、和装もあり二人の魅力がより伝わるコンサートになっていることを伝え、ミニコンサートから当日券で来場された方が多くいた。 ・藤原会長の挨拶と見送り 演者が見送る形で観客が先に退出となったが、多くの人が握手を求め「本当に素晴らしかった」との声をかけてくださり、二人の演奏が深く心に響いた様子が伺えた。	MC：安嶋 見送り：安嶋・田辺

実施団体：公益財団法人中間市文化振興財団
実施時期：令和６年12月20日（金）～令和６年12月22日（日）
出演アーティスト：森　梓紗（箏・二十絃）　東田　はる奈(笙)

アクティビティ

タイトル：あなたの知らない箏の世界アウトリーチin中間市議会議場
期　　日：令和６年12月20日　11：00 ～ 11：40
会　　場：中間市議会議場（中間市役所４Ｆ）
参 加 者：85名

今回、初めて議場を議会以外の用途で使用するということで、市長をはじめ、市職員、市議会議員、中間市民と多くの方々に参加いただき、４つのアクティビティ会場でも、一番の参加者数となりました。「箏を初めて聴く方にも分かりやすいプログラム」をテーマに、参加者を小学生に見立てた模擬アウトリーチを行い、「鳥のように」などの楽曲演奏、箏の歴史や楽曲の説明を体験した方々は、小学生になりきり大いに盛り上がりました。

タイトル：あなたの知らない箏の世界アウトリーチinくるり広場
期　　日：令和６年12月20日　14：30 ～ 15：00
会　　場：中間市こども家庭センターくるり広場
参 加 者：30名

０歳児から未就学児までの施設利用されているお子様、保護者を対象にアクティビティを行いました。森さんのアイデアで絵本「ころころころーころころ」を箏と笙の演奏を入れて読み聞かせを行ったり、東田さんがセンターの遊具（プレイハウス）から登場するシーンで小さなお子様が大きな関心を持っていたのが印象的でした。演奏後、箏に触れる体験コーナーを設けて、初めて箏を触るお子様の表情が生き生きとしていました。

タイトル：あなたの知らない箏の世界アウトリーチinさくら保育園
期　　日：令和６年12月21日　10：45 ～ 11：15
会　　場：中間市立さくら保育園
参 加 者：45名

２日目のアクティビティは保育園２ヵ所に伺い、保育園の年長クラスを中心に園児さんを対象にアクティビティを行いました。こども家庭センターで読んだ絵本の読み聞かせを絵本「たいこ」に本を変えて箏と笙の演奏に身体を動かしながら読み聞かせを行いました。演奏後には、箏に触れる体験コーナーをこども家庭センター同様設けて、大変興味を持って触れられていました。

タイトル：あなたの知らない箏の世界アウトリーチinみなみ保育園
期　　日：令和６年12月21日　14：30 ～ 15：00
会　　場：中間市みなみ保育園
参 加 者：35名

さくら保育園と同じアクティビティ内容で行いました。絵本「たいこ」の読み聞かせでは森さん、東田さんの箏と笙の演奏に合わせて園児が身体を動かして楽しんでいました。「鳥のように」の演奏後、森さんが「『○○のように』に入る動物は何でしょうか？」と曲目を当てるクイズを出した時に、園児が色々な動物を楽しく挙げていたシーンが印象的でした。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：あなたの知らない箏の世界
期　　日：令和６年12月22日　開場13：00　開演14：00
会　　場：なかまハーモニーホール　大ホール
参 加 者：199名

開演前にはホワイエで和楽器店「福岡あこや」さんのご協力で箏に触れることが出来る体験コーナーや箏を作る原木や部品の展示等、箏の魅力を知ってもらう貴重な機会を設けることができました。公演では、二十絃と笙の「星幻譜」を中心に、アクティビティでも演奏した「鳥のように」、「泡沫リバース」等を演奏し、箏と笙の音色の素晴らしさを伝えるコンサートになりました。

ホール担当者の意見・評価
中間市文化振興財団　事業係　木村　圭佑

①　応募の動機・事業のねらい

中間市も含め近隣の地域で邦楽のコンサート自体があまり無いため、普段聴く機会の少ない市民の皆さまを対象に邦楽の素晴らしさともっと身近に体験してもらいたいと思い、また、今回の「邦楽活性化事業」を通じて中間市の文化芸術の発展の一つの大きなきっかけになると思い応募しました。

②　企画のポイント

アクティビティに関しては、普段コンサートに入場できない未就学児を中心に、箏と笙の音色を聴き、実際に楽器に触れる事によって身近に感じてもらうことを大きなポイントとして企画しました。また、議場でのアクティビティに関しては、市長をはじめ市執行部と市議会議員の皆さま、傍聴席で市民の皆さまにも参加していただくことにより、当財団の活動を広く知っていただこうと思い企画しました。

ホール公演に関しては、市民の皆さまに「聴いて」・「見て」・「触れて」いただくことによって、箏の存在をより身近に感じてもらおうと、開演前に箏の体験コーナーや部品の展示等を設けました。また、公演に関しても、「あなたの知らない箏の世界」というタイトルに合わせて、森さん、東田さんによる箏と笙の説明等を織り込んだ、初めての方でも箏と笙についての知識を深めていける内容を企画しました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティに関しては、アクティビティ先の選定についてどこにすればよいのか考えました。特に市議会議場でのアクティビティは、議場で音楽コンサート等を開催したことはなく、前例のないイベントだったので、まず市議会に議場使用の了承を得ることが出来るのか不安でした。ホール公演に関しては、直前まで、チケットの販売数が伸びず、広報活動をどのようにするかで悩みました。また、開場後の体験コーナーについても、会場レイアウトやどのようにお客さまに体験してもらうかを考えるのに苦労しました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

議場については、議長をはじめ議会事務局の皆さまのご尽力で議場使用の了承を得ることができました。また、その他のアクティビティ先も当館館長の働きかけや保育園さんのご理解を得て、開催することができました。ホール公演に関しては、県内の箏教室、箏曲部等にチラシの送付を行い、ホール近隣地域を中心にポスティング等広報活動を行いました。また、体験コーナーのレイアウトも受付付近に設けることにより、立ち寄りやすい動線を作ることができました。

⑤　事業を実施しての成果

邦楽を聴くのは初めてという方も多くいる中、アクティビティ及びホール公演を通じて、未就学児から市民の皆さま、市執行部、市議会議員といった幅広い対象の方々に邦楽の素晴らしさを伝えられたとともに、当財団の活動も広く周知できたことはこれからの事業を企画する上で貴重な機会となりました。また、アーティスト、コーディネーター達とともに、一つの事業を作っていったことは私自身の大きな経験になりました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回初めての企画で慣れないこともあり、私が直前で体調を崩してしまったことと、他の主催事業が重なってしまったため、一つひとつの作業が後手に回ってしまいました。他のホールスタッフがカバー

してくれましたが、事前に業務進捗の引継ぎ等をもう少し詳しく伝える必要があったと反省しています。課題としては、直前になって広報活動を強化していったので、もっと計画的に広報活動を行う必要を感じました。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

普段ホール内での事業が多く、今回の様にアウトリーチ形式で２日間で４ヵ所も公演する企画は初めてだったので大変な所もありましたが、未就学児から大人まで参加者それぞれの反応が明るく活気もあり、その様子を見ることができて嬉しかったです。ホール公演を含め、こちらが狙いとしていた、市民の皆さまに邦楽の素晴らしさをお伝えすることが出来ました。この事業が地域を「活性化」させる大きなきっかけになってくれれば良いなと願っております。最後に、この事業でアーティストをはじめ、コーディネーター、サブコーディネーター、地域創造の方々、アクティビティ先の関係者の皆さま、ホール公演でお世話になった福岡あこやさん等、皆さまのご尽力で素晴らしい事業となりました。感謝申し上げます。

コーディネーターレポート
伊藤　由貴子

「その芸術を必要としているが届いていない人たちに、届けること」。５月に行われた全体研修会の折、児玉チーフコーディネーターの講義で語られたこの言葉が、実施団体である中間市文化振興財団／なかまハーモニーホール（以下、「ホール」と記します）の担当者の心に響き、出発点になりました。通常のホール公演では未就学児入場不可なので、今回のアクティビティでは、ふだんホールに来られない乳幼児を対象としたい。また、ホール初の箏コンサートを通して、市民に新鮮な体験を提供したい。この主催者側の明確な「…したい！」が、事業全体の輪郭をつくったのだと思います。

一方、森梓紗さんと東田はる奈さんのチームは、箏と笙という邦楽の歴史上にはなかった組み合わせ。そのため既存曲が少ないという難点はありますが、むしろそれゆえに自由な発想と創造力を発揮してプログラムを組めるのが強みです。今回もその強みを活かした新しいプログラムが生まれました。

■アクティビティの対象は、「市議会」と「乳幼児」

ホールからアクティビティ場所として提案されたのは、中間市議会議場と、保育園及び子育て支援施設。対象者が全然違うこれらの場で、どんな体験が届けられるかが大きなテーマとなりました。

①乳幼児対象の新しいプログラムづくり

乳幼児対象のプログラムは、森さんの、絵本を使って作るというアイディアからスタート。ただ、子育て支援施設の「乳児とその親」と、「保育園に通う５歳児」とでは、実施環境も対象者の理解度も異なります。その点を熟慮し、時間も短めに前者正味20分、後者30分のプログラムをめざしました。

子育て支援施設で選んだのは、オノマトペを使った絵本『ころころこーろころ』。乳児は親に抱っこされたまま、箏の演奏に合わせて体をゆらしながら音楽を体感。一方保育園では、いろんな動物が登場してひとつの太鼓をたたくという『たいこ』をチョイス。子どもたちが絵本の登場人物たちと一緒に声を出し手振り足踏みをして、箏や笙と共演できるプログラムが生まれました。

プログラム作りの過程では森さんと東田さんを中心に、語りかけの間合いや、実際やってみての面白さなどについて、地域創造側のチームからも意見を出し、試行錯誤を重ねました。また本番前のランスルーで、現在子育て真っ最中のホール担当者や、たまたま打ち合わせに来ていた子育て支援施設の責任者にも体験してもらい、子ども目線、親目線の意見をいただき、ブラッシュアップしていきました。

結果、子育て支援施設では、親子一緒にリラックスして耳を傾け、音楽にあわせて体をゆらし、ゆったりとした時間が流れました（お母さんの腕の中でぐっすり眠っていた赤ちゃんもいました）。また、保育園では子どもたちがお話の中にはいりこんで、声を出し、リズムを叩き、音楽と一緒になって楽しそうに参加してくれました。いずれの場所でも、最後に子どもたちが箏に触れる時間を作り、微笑ましいひとときが生まれました。

今回試行したことがもうひとつ。子育て支援施設は、利用者が自由に出入りできることがメリットとされているため、今回も可能な限りそれを阻害しないようにと、次のような始め方を試みました。

通常のアクティビティでは開始前に１時間程度、準備とリハーサルをします。それを今回は、施設利用者が通常通り遊んでいる状態のまま、私たちスタッフはできるだけ気配を消して、「なんとなく」準備を始めることにしました。そして「なんとなく」箏の音を出し始め、それをBGMのようにして空間に音をなじませ、開始時間になったら「皆さん、こんにちは～」と初めて全体に声をかける。そんな「ゆるい」形をとってみたのです。聴く側も、演奏する側も床に座り、同じ目線に。箏の音が鳴りはじめた時、子どもたちはちょっぴりびっくりしたようでしたが、その後は全く問題なく音楽に馴染んでいきました。今後、場所と内容によってはこれもアリではないかと思います。

②議場では小学生向けプログラムを実施

議場で実施することは、公共ホールにとって今後の予算確保にもつながるかもしれない貴重なチャンス。実現に漕ぎつけたホール担当者曰く「最初断られるかと思ったら、乗り気になってくれて、正直冷汗ものだった」そうですが、結果は大成功でした。

対象は市長をはじめとする市三役と議員の皆さん､そして市役所事務方幹部である部長職全員。更に、議会事務局が傍聴者として市民を招き、新聞取材も三社。まるで満席のホールのような雰囲気の中、小学４年生を想定したプログラムを体験していただきました。気さくな市長のおかげもあり、実に和やかに進行しました。

実は、議論の場である議場の音響は超デッド。議員席も全て固定で、それを「音楽空間」に設営し直す余地が著しく少ない場所なのですが、今回ホールの舞台スタッフが大活躍。下見に同行してさらりと寸法を測り、当日行ってみると的確な位置に平台を使った小さな「舞台」が出現していたのには、我々一同感嘆しました。これにより生音、生声で､「音楽」を届けることができたのです。

■多彩な音の世界が広がったホール公演。箏体験も。

「箏と笙の音が重なることの楽しさを伝えたい。皆さんの想像力を膨らませるプログラムにしたい」。森さんのそうした思いを込め､ホールコンサートでは､それぞれの楽器の伝統的な響きを紹介しつつ､箏･二十絃と笙による現代の作曲家の作品が並び、多彩な音の世界が広がりました。

開場時にはロビーでの箏体験も行われました。楽器店の協力で箏２面をお借りして設置、併せて箏の構造や製作過程がわかる展示も。森さんが作成した体験プログラムは、親指のみに爪をはめ、〈音を出してみる→指示された絃の数字通り弾いてみる→「さくらさくら」等のメロディーになる〉というもの。体験者の補助はホール職員の方々が担当。前日に森さんの直接指導で自ら体験の上、来場者への説明の仕方を習得して本番に臨みました。職員の方々は、前日音を鳴らすことの楽しさを実感したようで、当日は生き生きとした表情でお客様に接する姿が印象的でした。お陰で多くのお客様が箏に触れ、その音色が柔らかくロビーを包みました。

■「地域力」と「チーム力」

一般的には、議場でのアクティビティは異例であろうと思います。それを実現できたのは､「今、議会事務局が市民にもっと議会への親しみを持てもらうにはどうしたらいいか検討中」という情報をいち早くキャッチし、本事業とうまくリンクできたからでしょう。行政とホールの管理職や職員同士が、幼馴染や親族などのご縁も含め、顔の見える関係性を持ち、その地盤の上で活動ができていること…まさに公共ホールの持つ「地域力」と名づけたいもののパワーを、今回実感しました。

また、今回のホール公演のタイトルであり、事業全体の柱ともなった「あなたの知らない箏の世界」がホール職員で話しあって決められたことや、体験コーナーを職員間でアイディアを出しあって準備したことにも注目します。｢みんなで話し合って決めました」とは、簡単なようで実はなかなか言えない言葉。そういう意味で中間市での「チーム力」は光っていました。ホールでは、館長を筆頭に、いつも笑顔で、万全の準備をしてくださいました。感謝申し上げます。

今回アクティビティを通して生まれた新しいご縁を今後の活動に活かせますよう、願っています。

アウトリーチ進行シート（福岡県　中間市）
田中　舞（アシスタント）

実施日	令和６年12月20日
実施先	中間市議会
対象・実施先の情報	対象：中間市議会議員、市長、副市長、部長　※一般市民の見学あり 場所：中間市議会　議場
出演者	森梓紗（箏）、東田はる奈（笙）
ねらい／目標	箏の音との出会い、仲間との出会いを通し、新たな世界を切り開く喜びを伝える意図のプログラム。 小学４年生を対象とした、このアウトリーチプログラムを体験してもらうことで、アウトリーチの意義を伝える。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	挨拶（3：00）	主催の中間市文化振興財団職員による挨拶。このプログラムが、小学校４年生を対象にしたアウトリーチプログラムであることを伝える。	（公財）中間市文化振興財団職員
3：00	M1　鳥のように （中間部のみ） （1：20）	「鳥のように」（中間部のみ）	舞台下手側：箏　※上手側に電熱器、譜面台を配置しておく
4：20	MC：森（4：00）	中間小学校４年１組の皆さん、こんにちは！本日は、私の相棒お箏とともに東京からやってきました、お箏の演奏家の森梓紗です。本日はよろしくお願いします。 では、４年１組の皆さんに早速質問です。お箏見たことある人？ない人？（反応を見る） 皆さん４年生なので、５年生６年生になると、音楽の授業で体験することがあるかもしれませんね。 私はプロの演奏家として活動していますが、私がお箏を習い始めたのは皆さんと同じ４年生頃です。 最初に弾いた曲が左手も使っているのが見えましたか？ お箏は色々な音を出しますが、お爪は３本、たった３つの道具だけで、あとは指だけを使ったり、左手を使ったり、色々な弾き方が出てきます。 今は色々な弾き方をしたけれど、最初はそんな難しいことはできません。シンプルに音を出すところから、色々な弾き方を学んでいきます。 次は皆さんの知っている曲を演奏してみたいと思います。まず音の調子を変えますね。箏柱を動かして音の調子を変えることができます。（調絃実演） では聞いてみてください。（さくらさくらの音を出す） お箏を習い始めた最初は、さくらさくらを親指の爪だけで練習することから始めます。 始めはとてもシンプルなところからでしたが、お箏の色々な音を出してみたいなと思って練習していくと、とっても素敵なさくらさくらに変身していくんです。 それでは弾いてみます。	
8：20	M2　さくらさくら （1：40）	森梓紗（箏）	舞台下手側：箏　※上手側に電熱器、譜面台を配置しておく
10：00	MC：森（3：00）	シンプルなさくらさくらが、とっても素敵なさくらさくらに変身することができました。 お箏にはとっても素敵な音色が隠されていて、私もその音色に憧れをもって勉強して、今みたいに色々な音を出せるようになっていきました。 そして、私がお箏に一生懸命になった理由がもう一つあります。 お箏をやっているお母さんが、私が４年生のときに毎日練習していた曲は私の憧れでした。 その曲にはお箏の素敵な音がたくさん出てきて、私もこんな曲を弾いてみたいという憧れをもって、練習を頑張っていました。 今日は皆さんにも、私が４年生のときに憧れていた曲を聴いてもらいたいと思います。 次の曲、曲名が「○○のように」といいます。 作曲者はお箏の名手でもありましたが、その方がお箏の音を何かに見立てて表現した曲です。 その何かを、皆さんに考えてもらいたいと思います。 風景､色､生き物､何でもいいです。お箏の音からどんなものが想像できるかな？考えながら聴いてみてください。 では今さくらさくらの調弦になっているので、変えていきます。（調絃実演） 調子が変わりましたね。では、皆さん、私が憧れていた「○○のように」聴いてください。	
13：00	M3　鳥のように （5：20）	森梓紗（箏）	舞台下手側：箏　※上手側に電熱器、譜面台を配置しておく
18：20	MC：森（4：20）	○○のように、なんだと思いますか？思いついた人？ ～思いついたことを言ってもらう～ いろんな意見がありますね。作曲者は色々なものを想像しながら作曲しているので、色々な要素が入っていると思います。 曲名は「鳥のように」ですが、鳥といっても、鳥だけを表しているだけではないと思うんです。 鳥が舞っている広い空の様子、海辺にもいたかもしれない。川で何かをついばんでいたかもしれない。 みんながこんな感じだなと思ったことを、作曲者の方も同じように浮かべていたかもしれませんね。 私はこの曲に憧れをもって、お箏を弾いてきました。 そして、私は高校から音楽の道に進み、大学でとっても素敵な音の仲間に出会えました。 今日はもう一人素敵な音の仲間を紹介したいと思います。 どこかから素敵な音が聞こえてきますので、目を閉じてもキョロキョロしてもいいので、リラックスしながら聴いていてください。	
22：40	M4　盤渉調調子 （1：40）	東田はる奈（笙）	上手側扉から笙を演奏しながら入場。舞台正面まで移動。

24：20	MC：東田 （4：40）	中間小学校４年生の皆さん、こんにちは！笙を演奏する東田はる奈です。 笙という楽器は、漢字で書くと竹かんむりに生きると一文字で書きます。笙を見たことある人？ 笙というのは、普段は雅楽を演奏している、主にお寺や神社での演奏に使われる楽器の一つです。 笙の上の部分は何でできているかわかりますか？（反応を見る） 笙の上は竹でできています。本物の細い竹が17本、円を描くようについています。 さっき演奏していた「鳥のように」、実は笙も鳥をモチーフに作られています。 鳳凰が羽をたたんで休んでいる状態を模しているんですね。 笙には特徴的な点が２つあります。 １つ目、さっき入ってきた曲は雅楽の古い曲になりますが、聴きながら、息継ぎをどこでしていたかわかりましたか？ 管楽器のように息を使って音を鳴らす楽器は、息を吐いて音を出しますが、笙は吐いて吸ってを繰り返して音を出しています。（実演する） ハーモニカのような感じですが、笙は吐いても吸っても同じ音が出るというとっても珍しい楽器です。 ２つ目は、ここに置いてある電熱線が通っている「電熱器」です。 笙というのは、電熱器の上で温めないと音がでないという繊細な楽器です。 温めないと音が出なかったり、楽器が壊れてしまうこともあるので、常に人肌ぐらいまで温める必要のある、特徴的な楽器になっています。	
29：00	MC：森（2：30）	私は笙の音に大学生の時に出会い、なんて素敵な音だろうと衝撃を受けました。 そしてお箏と笙で一緒に演奏してみたいと思いました。 でも、両方とも日本の伝統楽器なのに、実はお箏と笙で共演するということはほとんどなく、お箏と笙の曲はそもそもほとんど無いんです。 そこで考えたのは、作曲家の仲間にお箏と笙の曲を書いてもらうことでした。 これから皆さんにお聴きいただくのは、2020年に、仲間の作曲家に作ってもらった「泡沫リバース」という曲です。 「泡沫」とは、こういう漢字を書きます。（フリップを見せる） どういう意味かというと、水の上に泡ができて、すぐパチンと弾けてなくなってしまう様を言います。 物事に例えると、物事は儚く、すぐに消えてしまったり、なくなってしまったりする、というイメージです。 作曲家は、この漢字を使いながら、箏と笙の音で、どんな世界を見て表現したのかな？想像しながら聴いてください。 そして、箏と笙それぞれに面白い音をたくさん使っています。 どんな風に弾いて、どんな音を使っているのかな？ということも楽しみながら、箏と笙の「泡沫リバース」を聴いてください。	「泡沫」の文字フリップを用意
31：30	M5 泡沫リバース （4：20）	森梓紗（箏）、東田はる奈（笙）	舞台下手側：箏　上手側：笙
35：50	MC：森、東田 （1：40）	これで、４年１組の皆さんに向けた箏と笙の演奏を終わります。ありがとうございました。 最後にお知らせです。（演奏会告知）	ポスターを見せながら告知
37：30			

実施団体：益城文化会館管理運営共同企業体
実施時期：令和７年２月14日（金）～令和７年２月16日（日）
出演アーティスト：安嶋　三保子（箏・十七絃）　田辺　恵山（尺八）

アクティビティ

タイトル：音楽のタイムトラベルー和の音色に乗ってー
期　　日：令和７年２月14日　12：00 ～ 12：30
会　　場：阿蘇くまもと空港新旅客ターミナルビル
　　イベントスペース
参 加 者：40名（空港利用者、空港職員スタッフ）

半導体受託生産の世界大手TSMCの熊本進出で国際化が進む阿蘇くまもと空港で実施。「春の海」、「鶴の巣籠」など４曲を楽器説明をしながら演奏、空港職員、スタッフ、空港利用者が和楽を堪能。イベントスペースは国際線の出口近くにあり、台湾便が到着したリハーサル時は海外の利用者が立ち止まって演奏に見入っていた。新旅客ターミナルは益城町にあり、空港を運営する企業から定期的なミニコンサート開催の依頼があり、今後検討。

タイトル：箏と尺八コンサートー花鳥風月ー
期　　日：令和７年２月14日　15：30 ～ 16：30
会　　場：東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパス
　　ゲートプラザ１階
参 加 者：50名（大学生・院生20人　教職員・スタッフ30人）

熊本地震で旧阿蘇キャンパスが被災し、2023年４月に熊本空港南側に移転してきた東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパスで実施。「千鳥の曲」、「十七絃独奏による主題と変容 “風”」など５曲を演奏。農学部の拠点施設で、キャンパス内には農場や畜舎があることから、吉沢検校の代表作「千鳥の曲」で、生き物や自然現象と和楽器とのつながりを説明、演奏の後は質疑応答を交えるなど教授や学生らと交流を行った。

タイトル：親子で楽しむ和楽器コンサート
期　　日：令和７年２月15日　11：00 ～ 11：30
会　　場：益城町復興まちづくりセンターにじいろ
　　多目的室２
参 加 者：10名（子育て家族、役場職員）

地域の交流・防災拠点として、2022年４月に整備された益城町復興まちづくりセンターにじいろで、午前の部は、親子連れを対象にしたミニコンサートを開催。「さんぽ」、「鶴の巣籠」、「汽車ごっこ」、「にじ」、「春の海」の５曲を披露、箏と尺八の音が出る仕組みなどをわかりやすく解説。「汽車ごっこ」では「きかんしゃトーマス」等を使って曲の内容を説明するなど小さな子ども達が楽しめるプログラムとなった。

タイトル：益城町の未来へつなぐ和楽器コンサート
期　　日：令和７年２月15日　14：00 ～ 14：45
会　　場：益城町復興まちづくりセンターにじいろ
　　多目的室１
参 加 者：15名（近隣住人、親子、学生）

会場の益城町復興まちづくりセンターにじいろは、2016年４月の熊本地震発生時のニュース映像の放映や被災状況を撮影した写真が展示されている。午後の部は、施設を利用する近くの住人の方が対象で、「祭りの太鼓」、「壱越」など５曲を演奏した後、復興のメッセージとして「上を向いて歩こう」を演奏、参加者が手拍子をとるなど益城町にとって意義がある内容となった。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：四季を彩る和楽のしらべ～箏と尺八コンサート～
期　　日：令和７年２月16日　14：00 ～ 16：00
会　　場：益城町文化会館ホール
参 加 者：225名

「和楽の優しい音色が益城町にひと足早い春を連れてくる、和楽の音色と一緒に“春よこい”」をコンセプトに２部構成で実施。第１部が和装、第２部が洋装。第１部は、「春の海」、「ゆれる秋」など５曲を演奏。第２部は、「十七絃独奏による主題と変容“風”」、「上弦の曲」など５曲を披露。「雁」の尺八ソロは高さが10メートル程あるパイプオルガン舞台で演奏する演出を行う。アンコールは松任谷由実の「春よ、来い」で、会場に春が訪れた。

ホール担当者の意見・評価
山森　英雄

①　応募の動機・事業のねらい

2016年４月に発生した熊本地震で震源地となった益城町は、地震から９年が経過したが、現在も復興に向けた整備事業が進められている。益城町の方々に邦楽の魅力に触れてもらいたいと考えて応募する。熊本地震の後に整備された阿蘇くまもと空港、熊本地震で旧キャンパスが被災し移転してきた東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパス、地域の交流・防災拠点として整備された益城町復興まちづくりセンターで地域交流プログラムを実施。

②　企画のポイント

熊本地震で被災し、大規模な補修工事が行われた益城町文化会館は、世界最高の音楽ホールと言われるウィーンのムジークフェラインやボストンシンフォニーホールと同じシューボックス（直方体）タイプのホールを持つ。東京藝術大学大学院の同期である２人の若手演奏家、コーディネーター、舞台スタッフが協力し、音響設計に重点が置かれたホールの特性を生かしたプログラムと演出を検討した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

益城町文化会館では年間10本以上の自主事業を行っているが、邦楽コンサートの経験がなかった。このため、箏と十七絃が曲ごとに調律が必要なことを全く知らなかったので、最初は演奏家とコーディネーターの会話の内容を正確に理解出来ていなかった。演奏する曲の選定と演奏順番、持ち込む楽器の種類と面の数が複雑に関係していることを認識するのにある程度の時間が必要だった。箏と十七絃の移動・運搬についても苦心した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

演奏家、コーディネーターの方々に指導して頂くだけでなく、福岡県中間市での地域交流プログラムとホールコンサートを見学に行った。益城町文化会館のスタッフの中に尺八を演奏する方がいて、箏と十七絃の楽器の特徴や邦楽コンサートの基本的な内容を教えてもらった。舞台転換作業を担当して頂いた熊本市の和楽器店の方にはコンサートでの作業内容や楽器の運搬など実践的な内容を教えてもらった。

⑤　事業を実施しての成果

熊本県立劇場のアウトリーチ事業を毎年実施しており、益城町の小学校で活動を行ってきたが、公共施設や民間施設での出前コンサート等を行ったことがなかった。空港と大学、そして、町の施設で地域交流プログラムを実施出来たことは大きな意義があった。ホールコンサートに200人を超える方々が来場し、「和楽器の演奏の素晴らしさと美しさ」を感じてもらったことも大きな成果があった。来場者から「感動した」という声を数多く頂いた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

前年に熊本県の宇土市民会館で行われた公共ホール邦楽活性化事業を見学に行っていながら、邦楽コンサートの大変さを認識出来ていなかった。邦楽について文化会館として勉強する必要があると感じた。１万4,000人が参加した熊本城マラソンと日程が重なってしまったことも反省点である。益城町は、熊本城マラソンを開催した熊本市に隣接しており、4,000人を超えるボランティアが参加し、集客などに影響があったと思う。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

熊本は邦楽が盛んな地域であるが、熊本に縁がない東京の若手演奏家が行う邦楽コンサートに足を運んで頂くには、さらなる丁寧な作業が必要だと感じた。地域交流プログラムは文化会館として大きな経験になった。空港や大学と関係性を築くことが出来たことから、来年度以降、阿蘇くまもと空港で年に１回はミニコンサートを開催し、広く音楽に親しんでもらうと共に、益城町文化会館をPRしていく。

コーディネーターレポート
谷垣内　和子

2016年の熊本地震から９年が経った。とくに甚大な被害に見舞われた益城町は、今もあちこちで工事が続き、復興途上感が色濃い。一方で隣町の菊陽町に世界的半導体メーカーが進出したことから、さまざまな影響が顕在化している。今回は、地震からの復興と新たな経済発展の動きの狭間で、益城町文化会館が果たし得る役割と可能性について検証する機会になった。

担当は登録演奏家１年目の安嶋三保子（あじま・みほこ）さん（箏・十七絃）と尺八の田辺恵山（たなべ・けいざん）さん。ともに東京芸術大学大学院で学んだ仲間だ。それぞれに多彩な活動を行っているが、本格的なホールコンサートの経験はさほど多いわけではない。ちょうど３週間前に養父市でこの事業を実施したばかりだったことが、スムーズな進行につながった。

■３か所で４つのアクティビティ～多彩なプログラム

①阿蘇くまもと空港

2023年３月に開業した新ターミナルビル１階のイベントスペースで30分のランチタイムコンサート。熊本国際空港㈱との初コラボレートである。くまモンと「ONE PIECE 熊本復興プロジェクト」にちなむ登場人物たちのパネルが周囲を取り巻く。人の行き来は多いが、長く足を止める人は少ない。アナウンスが流れ、人の声が騒めく。単なるデモンストレーションに留まらない邦楽コンサートはハードルが高い環境だ。演奏した《春の海》《鶴の巣籠》《みだれ》《壱越》は、古典と現代を意識し、箏と尺八のソロと二重奏を２曲ずつ取り上げたもの。音響面でホールスタッフのサポートが得られたのは大きかった。軽食をとったり､作業をしながら耳を傾ける人のほか､多くの空港事務所の方々が見守ってくださった。

②東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパス

被災した農学部を移転・再建したもので2023年４月開設。現代的なデザインの校舎を囲むように広大な放牧地や田畑が広がる。大学当局の協力下に40人余りの学生･教職員が参加し､自然や生き物にフォーカスした45分プログラムを実施。曲目は《春の海》《千鳥の曲》《鶴の巣籠》《十七絃独奏による主題と変容“風”》《上弦の月》。箏・尺八二重奏の間に箏の弾き歌いと尺八・十七絃のソロをはさむ形だ。

ゲートプラザと名づけられた会場は、２面がガラス張りで阿蘇の山並みが臨める空間のなかに、コの字型の木製ベンチが階段状に設置され、２階は吹き抜けになっている。開放感に包まれながら至近距離で演奏に接する好機となった。終演後には、生演奏の迫力と繊細な音色に感動したという感想のほか、音の出る仕組みや楽器の材質から価格についての質問等が飛び交い、和やかな交流の時間が流れた。人として生きる上で、文化芸術の価値を学び、知ることの大切さを説いた教員の言葉が心に残る。

③復興まちづくりセンター“にじいろ”

被災から復旧・復興への歩みをたどる展示を通して防災意識を高め、地域住民の交流をはかる施設として、役場の新庁舎隣に2022年春に整備。木造平屋建てで、３方がガラス張りの開かれた空間がユニークだ。高低差のある２つのフロアを午前と午後で使い分けて２つのプログラムを実施した。

(1) 子育て世代向け（午前）

乳幼児連れの家族向けの30分コンサート。靴を脱いでリラックスできるスペースで､《さんぽ》《鶴の巣籠》《汽車ごっこ》《にじ》を座奏。鶴や機関車の写真､《にじ》の歌詞カード等を用意して進めた。地域の関係施設等へのチラシ配布も行ったが、主な参加者は２家族のみ。集客に課題が残った。

(2) 地域住民向け（午後）

大人対象の45分コンサート。椅子を用いた立奏形式で、《春の海》《鶴の巣籠》《祭りの太鼓》《千鳥の曲》《壱越》と並べ、最後は観客も手拍子で参加できる《上を向いて歩こう》。参加者は10人程度に留まったが、楽しい時間を過ごしていただけたようでホッとした。

■ホール公演について

響きの美しさに定評のあるホールの特性を活かして、邦楽の魅力を伝え、地震からの心の復興を促すとともに、台湾からの移住者や工場関係者へのアプローチも視野に入れた取り組み。「四季を彩る和楽のしらべ－箏と尺八コンサート」と題し、「和楽の音色と一緒に春よこい」のキャッチコピーを添えた。

箏・尺八だけで飽きさせないプログラムづくりが最大の課題である。箏の類は曲ごとに調弦替えが必要なので、曲間の時間短縮のために複数の楽器を用意するケースが多い。しかし、持ち込める楽器の数と種類には制約がある。使用楽器と組合せ、楽曲の選択、演奏順はいつも悩ましい。今回は箏２面と十七絃１面を持ち込むことにし、それらと尺八のソロを軸に、少しずつ楽器編成の異なる楽曲を並べた。

開幕は箏・尺八二重奏《春の海》。《みだれ》は箏のソロで始め、途中から尺八が加わる。続いて尺八ソロ《鶴の巣籠》から箏の弾き歌い《ゆれる秋》を経て、箏・尺八の技巧が際立つ《壱越》で第一部を終える。緞帳を下ろして休憩を入れた後は、十七絃ソロ《風》からスタートし、オルガン・ステージでの尺八ソロ《雁》に続ける。視線の高さを変化させることで動きを演出。その後は《紫苑》（十七絃・尺八）、《上弦の曲》（箏・尺八）と続け、アンコールに《春よ来い》を添えて春待つ気分で幕を閉じた。

技術スタッフさんには事前に音源を送り、照明プランを検討していただいた。間際に出てきたアーティストからのリクエストにも、柔軟に対応し調整してくださったお陰で、魅力的なステージが実現した。彼らのスキルの高さに大いに助けられた。また、チケットの動きについては様子が分からず不安だったが、用意していたプログラムが不足するほどで、地元の邦楽ファンの方だけでなく、近隣の高校の箏曲クラブの生徒たちも来場していたという。その後、我が町のホールで聴く邦楽の響きに大満足したという声があったことを耳にして心底安堵した。

■今回の実践を振り返って

アクティビティごとに条件が異なったために、各回の選曲・構成に予想以上の時間を要した。結果的に曲数はかなり多くなり、アーティストの負担増と制作にかけられる時間不足を招く遠因となった。立場を異にする人々が協働するシーンでは、ホールごとの環境はもちろん、事業本来の目的や目標、そこに至るアプローチの方法、テーマ設定等について、アーティストとホール双方の思いを丁寧に聞き出し、すり合わせることが不可欠だが、十分に時間を費やすことが出来なかった。アーティストが演奏したい曲を並べるのは悪いことではないが、設定したテーマとの整合性、それぞれが思い描いていた着地点が一致していたかどうか。多くの楽器を持ち込んだ割にはトークが偏りがちになったのも否めない。テーマ設定から選曲と構成を吟味する段階で、もっと多角的に検討すべきだったのではないか。反省材料は尽きない。

そんななかで、サブコーディネーターの小松淳子さんは、現役の（公財）かすがい市民文化財団の統括プロデューサーであり、実に頼もしい存在だった。が、十分に手腕を発揮していただく場を提供できなかった点は申し訳なく思う。そして、今回の多様な取り組みが実現した最大の原動力は、山森英雄館長の幅広い交友関係とフットワークの良さにあったことを特筆しておきたい。彼ならば、この経験を今後に発展させてくれるに相違ない。改めて本事業を共に進めてくださった関係者の皆さまに感謝を申し上げたい。

アウトリーチ進行シート（熊本県　益城町）
小松　淳子（サブコーディネーター）

実施日	令和７年２月14日
実施先	東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパス
対象・実施先の情報	農学部の学生・職員たち（42名）、キャンパス内のゲートプラザで実施
出演者	安嶋三保子【箏・十七絃】、田辺恵山【尺八】
ねらい／目標	箏と尺八について学び、楽しみ方を伝える。「自然にまつわる花鳥風月」のテーマで、農学部の学生に生き物と自然現象を題材にした曲を届ける。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	挨拶 出演者紹介 注意事項伝達 呼び込み （4：00）	・山森さんより、今回のアクティビティの目的を説明。 ・大学側より、出演者の紹介、学生へのメッセージ。 「これからの社会は経済一辺倒ではなく、心豊かにみんなが幸せになれる魅力的な地域の発展は、芸術文化が価値の中心になっていく。そのような中で伝統文化、和楽器の邦楽があり、我々もその価値を知る機会をいただいた」 ・山森さんより演奏中のシャッター音のする写真撮影は禁止のお知らせ。出演者呼び込み。	舞台を３辺から取り囲むような３段の階段状になった客席。出演者が座る場所に「関係者席」と書いた紙を予め置いておく。 コンサートのポスターを舞台後方にイーゼルを立てて設置（裏面は「千鳥の曲」の歌詞）。
4：00	M1「春の海」 （4：50）	安嶋三保子【箏】、田辺恵山【尺八】	安嶋さん、田辺さん下手側より登場→ 前に出て礼→ 椅子に座って演奏
9：00	MC1 自己紹介 （1：00） テーマ説明 （1：00） M1､M2の曲説明 （4：00）	・自己紹介（安嶋→田辺） ・今回のテーマを説明「花鳥風月をテーマに、自然や生き物を表現した曲をお聞きいただく」（安嶋） ・Ｍ１「春の海」説明（田辺） 「瀬戸内海の穏やかな海をイメージして作られた曲」 ・Ｍ２「千鳥の曲」説明（安嶋） 「歌詞が作られた平安時代にタイムスリップしていただき、昔の人の気持ちや風景を感じていただけたら・・・」	「春の海」説明中に調弦（安嶋）。 「千鳥の曲」の歌詞のパネルを出し､持って説明（安嶋･田辺）。
15：00	M2「千鳥の曲」 （4：10）	安嶋三保子【箏】、田辺恵山【尺八】	椅子に座って演奏
19：30	MC2 尺八の説明 M3の曲説明 （4：10）	尺八の説明（田辺） ・２本の尺八（一尺八寸管、一尺六寸管）の音色比べ ・吹き方による音色の違い M3「雁」説明（田辺） 「鳥が喉を鳴らしているような表現（コロコロ）にも注目してください」	調弦後、客席へ移動（安嶋）
23：43	M3「雁」 （4：10）	田辺恵山【尺八】	前に出て立奏
27：53	MC3 箏･十七絃の説明 M4の曲説明 （3：00）	箏と十七絃の違いの説明（安嶋） 「17本絃があり、大谷翔平さんの背番号と一緒なので私は“翔平”と呼んでいます」 M4の説明（安嶋） 「曲の中にはいろいろな風の表現がされています。箏と十七絃の音色の違いにも注目してください」	十七絃の椅子に移動しMC（安嶋） 客席へ移動（田辺）
30：55	M4 「十七絃独奏による主題と変容“風”」 （3：25）	安嶋三保子【十七絃】	椅子に座って演奏
34：25	MC4 和楽器の説明 M5の曲説明 （4：50）	和楽器の特徴について実演を交えて説明（田辺） ・自然を取り入れた音（雑味）、倍音のこと M5「上弦の月」の説明（田辺） 「作者が上弦の月を眺めて作った曲。想いを感じて。」	椅子に移動しMC（田辺） 箏に移動し調弦（安嶋）
39：15	M5「上弦の月」 （4：45）	安嶋三保子【箏】、田辺恵山【尺八】	椅子に座って演奏
44：15	MC5 挨拶（1：30）	最後の挨拶、コンサートの紹介（安嶋）	前に出て挨拶 コンサートの説明時に、ポスターパネルを米原さんが持って紹介
45：40	交流タイム （14：00）	山森さんより交流タイムの案内 参加者と質問や感想を聞く（東海大学の高倉さんが質問者を指名） 「演奏中も調弦をしているの？」→「あります。演奏中に転調をする曲があるので。演奏中に調弦が狂ってきたなと感じると、修正したりする」（安嶋） 「洋楽器とも合わせて演奏することもある？」→「いろいろな方と共演します。尺八は安定して出せる音が５つなので、合わせるには工夫や技術が必要。でも合わさることでそれぞれの良さが出たりする」（田辺） 「箏の材木は？材質によって音が違う？尺八は？」→「基本は桐の木。木目によって音の飛び方が違う」（安嶋）「尺八は真竹。長さと７節というのは決まっている。それに合う竹になる」（田辺） 「音を鳴らすことは難しい？」→「爪が合えば小さい子でも鳴らせる」（安嶋） など	椅子に座って応答

実施団体：都城市文化振興財団・舞台事業組合共同事業体
実施時期：令和７年３月７日（金）～令和７年３月９日（日）
出演アーティスト：大萩　康喜（尺八）　折本　慶太（尺八）　大萩　絵理（箏・十七絃）

アクティビティ

タイトル：尺八の宴～竹の街で竹のひびきを聞こう！～
期　　日：令和７年３月７日　①10：30 ～ 10：45
　　②11：00 ～ 11：15
会　　場：都城市子育て世代活動支援センターぷれぴか
　　プレイルーム
参 加 者：①40名　②40名（０歳～３歳のお子様とその保護者）

普段接する機会の少ない日本の伝統楽器を身近に感じてもらうことにより、関心を持ってもらい、次世代に伝えたいという思いから、子育て支援センターで実施した。

未就学児を対象としたため、集中力が途切れないよう演奏時間は15分と短くした。初めて聞く尺八の音色に驚いていたが、遊んでいた手を止め、音楽に合わせて身体を横に揺らしたり、手拍子をし喜んでいる様子が見られた。

タイトル：尺八の宴～竹の街で竹のひびきを聞こう！～
期　　日：令和７年３月７日　13：30 ～ 14：15
会　　場：社会福祉法人博愛会障害者支援施設みどり園
参 加 者：39名（男性：21名、女性：18名）

身体障害のある入所者に文化芸術に触れていただきたいという思いから実施した。下見に行った際、イベントが大好きな入所者が多く、よく「安久節」を踊っているとのことだったため、プログラムに取り入れることにした。手拍子をしたり､踊る方が多くいらした。そんな入所者の喜んでいる姿を見て、施設担当者の方が泣いて喜んでおり、私達も思わず涙ぐんでしまった。

タイトル：尺八の宴～竹の街で竹のひびきを聞こう！～
期　　日：令和７年３月８日　10：30 ～ 11：15
会　　場：都城市養護老人ホーム友愛園
参 加 者：50名（男性：17名、女性：33名）

高齢者の方々に、日本の伝統楽器を身近に感じていただきたいという思いから実施した。都城市で有名な民謡「安久節」を中心に、高齢者の方々が楽しめる歌謡曲も取り入れた。「安久節」では、多くの方が手拍子をしたり踊るなどして積極的に参加され、歌謡曲では一緒に歌ったり、柔らかな表情で聴き入る姿が見られた。

タイトル：尺八の宴～竹の街で竹のひびきを聞こう！～
期　　日：令和７年３月８日　14：00 ～ 14：40
会　　場：養護老人ホームアシステッドリビング霧島
参 加 者：48名（男性：８名、女性：40名）

高齢者の方々に、日本の伝統楽器を身近に感じていただきたいという思いから実施した。都城市民謡「安久節」の演奏を中心に、高齢者の方々が楽しめる歌謡曲も取り入れた。「安久節」では、多くの方が手拍子や振付を踊るなど活発に参加され、歌謡曲では一緒に歌ったり、柔らかな表情で聴き入る姿が見られた。また、どのアクティビティ先でも、出演メンバーの紹介時、大萩康喜さんと大萩絵理さんがご夫婦でありお子様もいらっしゃるとのエピソードに、参加者から歓声や拍手が上がり、会場は温かな雰囲気に包まれた。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：尺八の宴～竹の街で竹のひびきを聞こう！～
期　　日：令和７年３月９日　14：00 ～ 15：20
会　　場：都城市総合文化ホール　中ホール
参 加 者：ホール公演：130名　ワークショップ：38名

「鹿の遠音」や「鶴の巣籠」、「春の海」など尺八の定番曲だけでなく、都城市の民謡「安久節」や宮崎民謡メドレーなどの耳馴染みのある曲をプログラムに取り入れ、親しみやすさを重視した公演にした。

賑やかな楽曲だけでなくしっとりとした楽曲も取り入れ、公演全体に緩急がついてメリハリのある公演となった。

また、尺八の吹き口を製作するワークショップを実施。参加者にも公演にゲスト出演してもらい、尺八の文化に触れていただく機会を提供した。

ホール担当者の意見・評価
事業課　假屋　沙織

①　応募の動機・事業のねらい

・普段、触れたり、聞いたりする機会の少ない日本の伝統楽器を身近に感じてもらうことにより、関心を持ってもらい、次世代に繋げていくきっかけづくりにしたい。
・日本の伝統楽器を、市民の方々に広く伝えるための事業を実施したい。併せて、この事業を通し、派遣していただく講師の方と一緒に創り上げていく中で、職員の企画・制作能力の向上を図る。

②　企画のポイント

この公演を通じて、都城市が誇る大弓に使用されている竹と、尺八の材料が同じ真竹という種類であるという情報を共有。これにより、日本の伝統芸能と地域文化との結びつきを深め、参加者に親近感を抱いていただける内容とした。

また、尺八の吹き口を参加者が製作し、舞台上で実際に共演するという体験型プログラムを取り入れることで、より深く尺八の文化に触れていただける機会を提供した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

竹のイメージの強い施設（都城島津邸、霧の蔵ブルワリー）をアクティビティ先として検討していたが、入場料や施設使用料がかかることから、予算の都合により実施を断念せざるを得なかった。

そこで、なかなかホールに足を運ぶことが難しい高齢者施設への実施を検討したが、ここでもアクティビティの実施日が土曜日であり、訪問候補先のスタッフ数が十分でない等の理由から、適切な訪問先を決定するまでに時間と労力を要した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

当ホールを利用してくださる施設に声をかけ、その施設からさらに複数の施設を紹介いただくことで、訪問先の選定を進めることができた。

⑤　事業を実施しての成果

１．尺八を身近に感じる体験型プログラムの実施

尺八の吹き口を製作するワークショップを取り入れることで、参加者に実際に楽器に触れる機会を提供し、尺八をより身近に感じていただくことができた。このような体験型プログラムは、単なる鑑賞に留まらず、深い興味と親しみを生む大きな成果となった。

２．幅広い年齢層が楽しめるプログラム構成

公演は、０歳から楽しめる内容を目指して構成した。特に、最初の曲「鹿の遠音」では、客席からの登場や照明効果によって曲の雰囲気を演出し、観客を物語の世界へと引き込んだ。

３．地域文化の活用と賑やかな雰囲気

都城民謡「安久節」や「宮崎県民謡」を取り入れることで、会場全体を賑やかな雰囲気で包むことができた。地元の伝統文化を活用した演出が、参加者の親近感や関心を高めることができた。

４．メリハリのある演奏プログラム

「鶴の巣籠」や「ふたつのいのち」のようなしっとりとした楽曲では、未就学のお子様も静かに聴き入る様子が見られ、公演全体に緩急がついてメリハリが生まれた。これにより、幅広い年齢層にとって満足度の高い内容にすることができた。

５．SNSの活用と成果

アクティビティ中の写真をSNSに随時アップロードし、公演の雰囲気を効果的に発信する努力を行った。その結果、当日券62枚を販売することができ、一定の成果が見られた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

１．尺八の魅力を効果的に伝える広報の難しさ

尺八の良さをどのように伝えるかが難しく、広報活動に苦戦した。出演者に協力を仰ぎ、尺八の演奏やコメント動画をいただいて、明るい雰囲気の編集を施し、ホールロビーで流したり、SNSで告知するなど、工夫を凝らしたが、さらに工夫の余地があると感じた。

２．広報手段の改善点

今回の広報活動ではSNSをメインに行ったが、コーディネーターやサブコーディネーター、地域創造の関係者の皆様からもアドバイスを得ることができれば、より効果的な方法を見つけることができたのではと思った。

３．今後の改善に向けて

尺八に触れたことのない参加者にも魅力を伝えるため、多様な広報手段や、参加者が興味を持つ切り口の探求が必要だと感じた。地域の特性や親しみやすい内容を取り入れながら、公演の魅力を広く伝えられる方法を模索していく。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

今回のアクティビティ先では、イベントが大好きな入所者が多く、音楽公演などの文化芸術に触れる機会を求めていることを知った。ホールとして、なかなかホールに出向くことのできない方々への芸術文化の提供はもちろんだが、ホールに来館されるかどうかに関わらず、情報提供の必要性を感じた。

ホール公演では、来場者の多くが初めて尺八の音色を聞くという方が多かった。日本文化を継承するためには、こうした伝統音楽を定期的に楽しむ場を設けることが非常に重要だと感じた。また、地域に伝わる民話や都城市の特産品などを取り入れた独自の公演を実施することで、地域の活性化に貢献し、地域の人とのつながりを深められる事業を企画していきたい。

コーディネーターレポート
伊藤　由貴子

「その地域の持ち味を活かしたプログラムを作ること」。これが本事業を実施する際に留意したいことの一つですが、この点、都城市での事業は、主催者側とアーティストの思いが良い形で実を結んだ事例であったと思います。

■「竹の楽器・尺八」と「竹の街・都城」の出会い

都城市は竹の大弓（だいきゅう）生産日本一の「竹の街」。全体研修会の折に大萩康喜チームのプレゼンを見て、都城総合文化ホールの事業担当者（以下、ホール担当者）の頭の中で、「竹の楽器・尺八」と「竹の街・都城」が、ピッタリときたそうです。竹の街なのになかなか聴く機会がない尺八を市民に是非紹介したい！この思いが、本事業全体を貫く芯となりました。

一方、今回のリーダーである大萩さんは、「竹」との出会いで自身の人生が拓かれてきたという実感を強く持って活動してきました。それゆえ「竹の街」というキーワードに、あっという間にハマったのでした。大萩さんの強みは、尺八演奏家であると同時に製管師（尺八製作者）でもあるということ。演奏を通して「尺八の面白さを伝える」のはもちろんのこと、聴いてくださった方が「尺八を吹いてみたい」と思うところまでもっていきたい。可能ならば尺八製作体験を盛り込み、更に製作した尺八で共演もできないか…。ホール担当者の思いを受け、アーティストのアイディアは膨らみました。

■体験コーナーを盛り込んでみよう

大萩さんの「製作体験」案に、ホール担当者も大賛成。しかし実施に当たっては、いろいろな課題を細かく詰めていく必要がありました。参加者の対象年齢、人数、募集方法、体験する場所と時間帯、材料の確保と配送、体験内容の精査、体験補助の人員確保、そして体験者との共演をどうプログラムに盛り込むか…。このテーマに特化したZoomミーティングやメールでの細かなやり取りを重ねました。

そして、ホール公演当日に、開場前のロビーで、30分間の体験ワークショップ「尺八の吹き口をつくって吹いてみよう！」が実現しました。大萩さんが講師を、ホール職員２名が補助役となり、親子連れ40人ほどが吹き口の仕上げに挑戦。更に、大人も子どもも、自ら磨いた吹き口を手に、本番の「共演コーナー」で舞台に上がり、嬉々として笛を吹き鳴らすというシーンも生まれました。

■ホールコンサートのプログラムづくり

上記の製作体験を盛り込んだホールプログラムが完成するために、指針となったのはホール担当者から提案されたタイトル「尺八の宴（うたげ）」でした。この「宴」に相応しいプログラムとは？アーティストの試行錯誤の結果が下記です。まるで「宴」のコース料理をシェフの解説付きで楽しんでいただくような構成となりました。このプログラムに合わせ、ホールの舞台スタッフが素晴らしい照明を作ってくれたお陰で、この「宴」がいっそう盛り上がったことに、この場を借りて御礼申し上げます。

最初のアミューズは「鹿の遠音」。客席と舞台上で尺八二本が鳴き交わす演出で、尺八の世界へ。▶次に食材や料理法を解説。尺八を作る竹は都城名産の大弓と同じ真竹（まだけ）。たった５つの穴だが、工夫して様々な音程や音色を出すこと。音階は「ドレミ」でなくて「ロツレチハ」。「ロツレチハ」で歌う体験や、「春の海」の演奏を聴く前に曲のイメージを体の動きで表現するなど、客席参加型を導入。▶様々な味わいの紹介として、お正月の定番「春の海」、現代的なノリの「ホワイトフォレスト」、民謡県宮崎を意識した「民謡メドレー」を演奏。▶地元の素材を使ったメニューは、都城の民謡「安久節（やっさぶし）」で盛り上がるコーナー。ここで製作体験参加者がステージに上がり、客席も掛け声と手拍子

で共演。ホール全体が盛り上がる。▶照明を一転、濃厚なメインディッシュ「鶴の巣籠」のシリアスな演奏。▶デザートは、大萩夫妻の双子誕生を祝って創られたオリジナル曲「ふたつの命」で、ほっこりとクールダウンして、終演。

■アクティビティ

アクティビティ先は、子育て世代活動支援センターと、障害者支援施設、養護老人ホーム２施設。アクティビティでは、上記ホール公演のプログラムを基本にしつつ、各施設の対象者や場所の状況に合わせ、享受する側である乳幼児とその親の目線、高齢者の目線、施設スタッフの目線など、多角的に考えてカスタマイズ。加えて、施設スタッフの方々の癒しになれたら、とも考えました。

①子育て世代活動支援センター

施設の目的である「子育て中の親の孤独感、不安感等を緩和し、子供の健やかな育ちを支援すること」（厚生労働省の要綱参照）を意識し、「親子両方が」リラックスして楽しめることをめざしました。

会場では、子どもたちが違和感を感じないように、スタッフ全員がどうふるまうか考えて準備をすすめ、プログラムは１コマ15分とコンパクトに。本番前のリハはせず、いつもの自然な状態のまま即興的な演奏でスタート。「春の海」や「安久節」を使って、手振りや手拍子で共演しながら、伝統楽器の音に親しみました。子育て中の大萩さんの思いを込めた「ふたつのいのち」では、親たちのしみじみ共感する表情が印象的でした。

②障害者支援施設、養護老人ホーム

いずれも対象となるのは外出して何かを楽しむことが難しい方々。下見の際の聞き取りから、より楽しめるよう、楽器紹介の場面とアンコール曲に演歌を取り入れました。それ以外はほぼホールコンサートと同じ構成で、「ロツレチハ」「春の海」「安久節」の参加型も入れつつ、曲数や長さを絞った40分の抜粋版で実施。障害者支援施設では、入所者の方々がプログラムの各場面で生き生きと反応してくださり、施設スタッフも感極まるほど。また養護老人ホームでは、「安久節」で手踊りする方や演歌を口ずさむ方、大萩さんの結婚や双子誕生の話題に大きな拍手が湧くなど、家族的な交流が生まれました。

■今後の展開へのヒント

ホール担当者は、主催事業の企画制作を担当するのが今回初めてだったそうですが、終演後の振り返りで、「安久節で会場が一つになったように、都城にしかないものを取り入れて、市民とホール、音楽をつなぐことができた」と達成感を滲ませました。この実感が確実に次へのエネルギーとなることでしょう。彼女の上司である課長も「職員の育成も兼ねた事業と思っており、自分としては成功だと考える」と仰いましたが、こうした経験の積み重ねが公共ホールの人と事業を育てていくのだと信じます。

集客向上のための広報は課題かもしれませんが、次のようなエピソードがヒントとなる可能性が。

アクティビティ先のどの施設でも皆さんがワクワクして待っていらしたので、なぜ？と伺うと、いずれも「ホールの方が自らパンフレットを届けにきてくれたんですよ！」と答えが返ったこと。午後の実施施設に着くと、「先ほど（午前中の施設から）とてもよかったよ！！と電話がありまして」と言われたこと。子育て世代活動支援センターで体験した親子が、ホール公演に家族連れで複数組も来場していたこと。些細なことのようですが、人の熱意をちゃんと受け止め、つなげていく土壌がこの地域にあるのだ、と羨ましく感じました。こんな土壌の上にホールと地域をつなぐネットワークが築けたら、通常の広報手段を超えて、着実に浸透していく力となるのではないか、と予感します。今回の事業をスタートとして、どうか継続していかれますように！

アウトリーチ進行シート（宮崎県　都城市）
林　真智子（サブコーディネーター）

実施日	令和７年３月７日
実施先	子育て世代活動支援センター　ぷれぴか
対象・実施先の情報	対象：生後３ヶ月～２歳児とその保護者 実施先：子育て世代の様々な活動支援を行う施設「ぷれぴか」内にある小学校３年生までの親子で遊べるプレイルーム
出演者（編成）	大萩康喜（尺八）、折本慶太（尺八）、大萩絵理（箏、十七弦、三味線）
ねらい／目標	普段触れる機会が少ない和楽器の生演奏を乳幼児と保護者の両者に楽しんでもらうことを ねらいとする。また、対象者が集中できる時間を考慮し、演奏時間を15分とコンパクトにしながらも曲目は民謡から古典まで揃え、充実した内容を届けることを目標とした。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
10：20	舞台準備	（会場は板の間） 上敷を敷き、舞台（演奏スペース）とする 演奏エリアの下手側に箏を設置 ＊会場の家具などの移動はほぼ無し。普段通りの状態をできるだけキープ	演奏者は普段着 当日の会場でリハは無し 上手側から折本さん、大萩さん、絵理さんの配置
10：30	入場、演奏開始 『音風景』 （3：00）	オンタイムで伊藤さんの合図で演奏開始 大萩さん、折本さんはそれぞれ部屋の隅から自由なルートで演奏しながら登場する	演奏スペースには 絵理さんのみ着座 大萩さん、折本さんは開演前に部屋の隅に移動し、目立たないように待機 地域創造スタッフもできるだけ自然に会場内に散らばって着座
10：33	自己紹介 『山の音楽家』 （2：00）	絵理さん「わたっしゃ音楽家＜えりちゃん＞です。 上手にお琴を弾いてみましょう」 （箏の古典的なフレーズを弾く）「いかがです？」 折本さん「わたっしゃ音楽家＜おりちゃん＞です。 上手に＜短い＞尺八を吹いてみましょう」 （古典的な尺八を吹く）「いかがです？」 大萩さん「わたっしゃ音楽家＜よしちゃん＞です。 上手に＜長い＞尺八を吹いてみましょう」 （尺八を吹く）「いかがです？」	マイクの使用なし 『山の音楽家』の曲に のせて自己紹介 （客席は手拍子）
10：35	『春の海』 （3：00）	大萩さん「皆さんこんにちは。これからこの楽器を使って いろんな曲を聴いていただきます。 まずは『春の海』、体を動かしながら聴いてみよう！」 （曲の流れに合わせて、座ったまま） 「波のように揺れてみよう」 「あ、空には鳥が飛んでいるようだよ」 （上を見て鳥を眺める動き） 「みんなで泳いでみよう」（平泳ぎの動き） 「大きな波が立っているね、ザブーン」 （大きな波が立つ動き） 「また綺麗な波が立っているね、キラキラキラキラ」 （手のひらを使ってキラキラを表現）	『春の海』の曲の流れ に合わせて大萩さんが 客席に動きを誘導
10：38	『安久節』 （3：00）	大萩さん「この地域には民謡があるの知ってる？ これから演奏する曲は安久節という民謡です。 皆さん、手拍子をお願いします！」 絵理さん（三味線を演奏しながら） 「ヤッサヤッサー、トコサッサヨイヤサー」 【手拍子のテンポをゆっくり→どんどんテンポアップ→最後はみんなで「せーのっ」パン！（一本締め）で終わる】	箏前方で三味線を弾く 他の出演者は手拍子を 促す
10：41	『ふたつのいのち』 （2：00）	大萩さん（保護者の心に訴えることをねらいとし）「実は私と箏を弾いている人は夫婦でして、私たちもいま、２歳８ヶ月の双子の娘がいます。生まれた時に友人の作曲家が作ってくれた大切にしている曲を演奏したいと思います」	
10：43	ホールからの告知	ホールからの告知 帰りに演奏したプログラム（簡単な曲目・出演者プロフィールを記載）とホール公演のチラシを配布	演奏者は演奏エリア 後方にある控室に移動
10：45	終了		＊同じ内容で11時から２回目を実施

実施団体：名護市地域経済部文化スポーツ振興課
実施時期：令和６年10月18日（金）～令和６年10月20日（日）
出演アーティスト：森　梓紗（箏・二十絃）　東田　はる奈（笙）

アクティビティ

タイトル：琉球の伝統文化を繋ぐ～生き物文化～
期　　日：令和６年10月18日　11：00 ～ 11：40
会　　場：わんさか大浦パーク（二見以北地域交流拠点施設）
　　多目的室（１階）
参 加 者：18名（あぐー豚等琉球在来種の伝承者等）

あぐー豚等琉球在来種の豚の保存・育成に取り組む団体の職員等を対象に、本市の二見以北地域交流拠点施設であるわんさか大浦パーク（地域のゆたかな暮らしと活気づくりのために運営している直売所）を会場に奏者の背を海、会場内を紅型幕で装飾演出し、鑑賞者も演奏者も楽しめる雰囲気のあるアクティビティを開催。また、アクティビティ終了後に演奏者を交え、あぐー豚料理を味わいながら、あぐー豚の由来､あぐー食の歴史等を説明受けながら交流を図った。

タイトル：琉球の伝統文化を繋ぐ～衣文化～
期　　日：令和６年10月18日　15：30 ～ 16：10
会　　場：藤崎紅型工房　工房（１階）
参 加 者：15名（工房職人、伝統工芸愛好者等）

紅型や草木染の保存・継承に取り組む工房の職人等を対象に、工房内を会場とし、会場内を紅型制作の過程が分かるよう実際に使用している道具、紅型の反物で演出し、鑑賞者も演奏者も伝統ある芸術が生まれる厳かな雰囲気のあるアクティビティを開催。また、アクティビティ終了後に演奏者が紅型の絵付けを体験しながら沖縄の伝統的な染め物の歴史や特徴の説明を受け交流を図った。

タイトル：琉球の伝統文化を繋ぐ～食文化～
期　　日：令和６年10月19日　11：00 ～ 11：40
会　　場：仲尾トンネル（1919年、沖縄で初めての手掘りトンネル）
参 加 者：24名（名護市食生活改善推進協議会員等）

伝統的な琉球料理や地元の食材を活かしたレシピの作成・継承に取り組む団体の会員を対象に、仲尾トンネルにて風の音、鳥のさえずりとともに鑑賞者も演奏者も自然と人工物が調和した雰囲気のあるアクティビティを開催。また、アクティビティ終了後に演奏者を交え、琉球伝統の食事やおやつを頂きながら、交流を図った。

タイトル：琉球の伝統文化を繋ぐ～芸能文化～
期　　日：令和６年10月19日　15：00 ～ 15：40
会　　場：久護家（沖縄県有形文化財）
参 加 者：31名（名護市屋部区踊り団員等）

屋部区豊年祭（踊りや歌、伝統芸能を披露し五穀豊穣を祈り、豊かな実りに感謝することを目的とした祭り）の保存・継承に取り組む団体の会員等を対象に、沖縄県有形文化財である屋部の久護家にて、迫り出し舞台を設置し、中庭で木々のせせらぎ、鳥のさえずりとともに鑑賞者も演奏者も芸能人としてインスパイアされたアクティビティを開催した。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：KOTO SHOW　箏×笙　めぐる出逢い　つながる想い
期　　日：令和６年10月20日　17：00 ～ 18：40
会　　場：名護市民会館　中ホール
参 加 者：220名

日本文化との出逢いと琉球文化とのつながりをテーマに箏と笙の伝統的な調べと魅力をお届けした。第一部は、伝統的な厳かな雰囲気の中、和装で登場し、演者の思いが詰まった重厚な調べ。第二部は、打って変わって洋装に藤崎工房ご提供の紅型のストールを合わせた軽やかな調べで箏と笙、それぞれの音の面白さを伝えた。アンコールでは、４箇所のアクティビティの様子をまとめた映像を流しながら、コンサートを締めくくった。

ホール担当者の意見・評価
名護市文化スポーツ振興課　阪上　成子

①　応募の動機・事業のねらい

沖縄県において、琉球古典芸能に触れる機会は多くあるが、邦楽はわずかである。一方、和琴等の邦楽サークルは、一定数あり、邦楽の未経験者、経験者に対し、邦楽の接触機会の提供、伝統芸能を継承していくすばらしさを伝えたいため、応募した。

②　企画のポイント

日本の文化において、特に琉球の文化の違いをテーマに「芸能文化・衣文化・食文化・生き物文化」の４つの琉球文化を継承している方々を対象にインスピレーションや今後の活動についてのヒントとなるような企画がしたいと考えた。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

仲尾トンネルでのアウトリーチにあたり、警察署等への道路使用申請等の手続き

④　上記③をどのようにクリアしたか

仲尾トンネルは、名護市の市道であるため、管轄部署（区民、市建設部、消防署、警察署）に現場確認、調整等を繰り返し申請が正式に承認された。

⑤　事業を実施しての成果

今回の事業において、関係各所との事前調整からアクティビティ開催までの流れを職員全体で共有しながら進め、仮設舞台、音響、照明を設置し屋外での演奏会として、演奏者、鑑賞者へ届けることが出来た。アクティビティ終了後は、鑑賞者と演奏者との交流も企画することが出来た。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

箏と笙という繊細な楽器の運搬方法や取り扱い方法などに苦慮したが、コーディネーターはじめ地域創造のみなさまのご協力でクリアできた。特に笙は、はじめてご覧になる鑑賞者が多く、楽器の仕組みや歴史などにさらに一歩踏み込むようなプログラム作り・演出が必要だと感じた。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

名護市民でも知らなかった新たな地域の魅力を発掘、広めることは、地域と市民会館スタッフとの密着化、創造的なプロダクトを生み出し、地域力のすごさを感じ、それらがスタッフの自信につながった。様々な地域課題を考えるキッカケ作り、各コミュニティとホールを繋げ、地域の文化交流拠点として、名護市の街づくり、沖縄県北部地域の芸術文化振興にホールの役割は大きいと改めて実感した。

コーディネーターレポート　《出会い》そして《つながる》
米澤　浩

2024年６月19日第１回コーディネーター会議が開かれ、私は沖縄県名護市民会館（以下、会館）で箏奏者の森梓紗さん（リーダー）・笙奏者の東田はる奈さんのデュオチームを担当することになった。（以下、敬称略）色々な意味で楽しみな事業を担当することになったが、《森・名護チーム》がスタートした時点で既に事業実施までに４ヵ月を切っていた。

Zoomミーティング（ZMT）

７月上旬に会館、下旬にアーティストとのZMTで諸々を整理し、現地下見の準備を整えた。

会館では「おんかつ」も実施し、事業実施にあたってはテーマを設けている。今回のテーマは「名護で継承されている文化の継承者」と「箏・笙の演奏家」が出会って交流する『異なる文化の出会いとつながり』だった。

森・東田とのZMTは会館からの情報を踏まえ、実施場所についての可否の確認方法、コラボなどのアイデアについては音楽面の要件、各現場で笙が電熱器を使用するための諸々を整理・確認。森は海外ツアーの経験もあり「箏を手荷物として空路で運ぶ」ことへの心配は無かった。

現地下見

8/21森・地域創造スタッフ４名は那覇空港で本事業ご担当の阪上さんの出迎えを受け、『名護で継承されている文化･交流する方々』でテーマ分けされた『アクティビティ（AC）候補地』５ヵ所と『ホール下見』へ。

『屋部（やぶ）の久護家（くごけ)』（県指定有形文化財）では『芸能文化』をテーマに『屋部八月踊り保存会』の方々と、『わんさか大浦パーク』（地域交流拠点）では『動物の文化』をテーマに『アグーを飼育』なさっている方々との交流。

『藤崎紅型工房』では『衣の文化』をテーマに『紅型技法を継承』なさっている方々。工房見学で素敵な作品が目に留まり、会館の平得（ひらえ）館長に藤崎氏への相談をお願いし、「紅型ショール」をお借りしてアーティストが衣装の上に羽織れることになった。

『仲尾トンネル』（雨天時は仲尾公民館）では『食文化』をテーマに『名護市食生活改善推進協議会（通称：わかめ会)』の方々。『仲尾トンネル』は農作業のため県で最初に「手掘り」で掘られ105年の歴史を持つ。湿気を嫌う箏や笙に無理が無いか不安だったが、現場に立つと湿度は『屋部の久護家』と変わらなかった。しかし即決は避け、森に東田と相談して欲しいと依頼。帰京後に森から「東田はトンネルやダムなどの音響空間での演奏に憧れていた。」との情報、『仲尾トンネル』での実施が予定された。

沖縄オリジナルの紅茶文化を育てる『金川（かにがわ）製茶』を最後に訪れて候補地下見を完了、会館に戻っての『ホール下見』でも様々なアイデアがあり、ホール公演も楽しみになる下見となった。

名護入り

10/17森・東田・地域創造スタッフは那覇空港に降り立ち、阪上さん・館長の平得さん・事業主任の池宮城さんらの出迎えを受け、《森・名護チーム》が顔を揃えた。

会館に到着後、ACのランスルーをホール公演会場の中ホールで行ったが、我々の到着時にはホールの準備は既に整い、正板部分に美しい紅型幕が吊られていた。ランスルーは音楽面での問題など無く、森が丁寧にまとめたMC原稿を基に今回の事業でアーティストが取るべきスタンスやステージマナーの確認のみでテンポ良く進み、ホール公演の演奏位置決めも完了。

MCの中、東田が笙の説明で「伝説の鳥〈鳳凰〉が羽を休める姿にも例えられ」と話した時、平得館

長が「その話は本番の時もする？」と、東田が「はい」と答えると「ちょっと待ってて」とホールから出て行き、戻って来た時に何やら運び込んで来た。それが広げられると、二匹の〈鳳凰〉が向き合っている見事な紅型幕だった。元々吊られていた紅型幕を上手と下手に分け、中央に〈鳳凰〉の紅型幕が吊られホール公演の舞台美術が完成。さぞ二人のモチベーションも上がったことだろう。

アクティビティ（AC）

・初日、１公演目『わんさか大浦パーク』はガラス張りの壁面に緑と大浦湾の海が広がり、そこに美しいジョーゼットが施されて背景の一部として会場を彩っていた。ここでは森・東田は「かりゆし」姿でプログラムを運び、ご来場下さったお客様方も非日常的空間でのコンサートをお楽しみ下さったことだろう。AC後は「我那覇（がなは）畜産」の方々との交流だが、我々の前に運ばれて来たのは茹で上げた山盛りの「アグー」で「我那覇畜産の方々による大歓待」だった。

・２公演目は『藤崎紅型工房』。工房に伺うと「伸子（しんし）張り」された紅型の反物が何本も張られて会場を彩り、紅型工房ならではの空間が設営されていた。その中、お借りした色違いの「紅型ショール」を羽織った森・東田は、紅型工房ならではの装いでプログラムを進めた。AC後は「紅型の染付体験」。花柄をポーチに染め付けるのだが「色は自由に選んで」と言われた二人は熟考、染付を始めると演奏時にも負けないほどの真剣さだった。「紅型ショール」を羽織った佇まいが良かったので、再び平得館長に「ホール公演のカーテンコールで登場して来る時に、あの紅型ショールを羽織って登場してアンコールを演奏するのはどうでしょう？」とご相談。藤崎氏もご快諾下さり、名護ならではの要素が又一つ増えた。

・２日目、３公演目の『仲尾トンネル』に到着すると仮設舞台が設営され、照明･音響の準備が万端整っていた。ステージはトンネルの出口際に設置、トンネル内の客席からアーティスト越しに空と海を臨む設営だった。音響はMCのみで演奏は生音、客席エリアで響きの確認をしていて管楽器奏者は必ずここで演奏したくなると納得。この日のアーティストはタイダイ柄（絞り染）の衣装で登場してプログラムを進めたが、心地よい海風とトンネルの響きを満喫できるACとなり、今回一番の響きの良さであった。ここではNHKと民放の２局が取材に入り、その日の夕方のニュースで紹介された。AC後は『仲尾公民館』に移動し「わかめ会」の方々との交流。同会は農林水産省の「食育活動表彰」で「消費・安全局長賞」を受賞している。会員の方々手作りの自然食と「島バナナ」に舌鼓を打ちながらの歓談の一時だった。

・４公演目の『屋部の久護家』では庭に面した外廊下から張り出しの仮設舞台が設営され、準備万端整っていた。リハを進める中、笙の登場動線が話題になった時、平得館長からの「外廊下を歩いて登場して来たら」と『久護家』を活かしたアイデアに諸手を挙げて賛成。仮設舞台の広さ等の問題で「八月踊り保存会」の方々の舞台を鑑賞する交流は残念ながら断念した。ここでも民放１局が取材に入ったが、『久護家』の佇まいを眺めながらのACは他には無い空間・時間で、森・東田がアンコールで演奏し『久護家』の庭に流れた《涙そうそう》の響きには《深い癒し》を感じた。

会館に戻り、翌日のホール公演のためにスタッフの方々の「転換の練習」に重点を置いてホールプログラム全体の段取り確認。邦楽事業で会館にとってハードルの一つとなるのが「舞台転換」で、地域に

「箏屋」が無い場合や、あったとしても現代邦楽のステージングに慣れているとは限らない。ならば、ホールのスタッフさんがステージングを覚えてしまえば邦楽事業の継続も視野に入る。バックヤードで箏を準備する机の位置、調絃場所の確認、笙のためのヒーターの養生等の確認と並行し、事業担当の運天（うんてん）さんに転換を覚えて頂いた。難しいことは無いと思う。本番では運天さんはもう一人のスタッフさんと組んで「舞台転換」を難なくクリアなさっていた。

ホール公演

午前中は軽めの音楽練習、午後のゲネプロは非常にスムーズであった。開場時には入口にお客様方が列を成し、ACでお世話になった方々やニュース番組の効果もあってか多くのお客様がご来場下さり、いよいよ開演。

プログラムは森が自らのアイデンティティ形成のきっかけとなった箏独奏曲で幕を開け、笙独奏の現代曲、名護で初めて舞台に掛ける二十絃箏の演奏と意欲的な構成だった。又、１部では森が黒紋付で東田が装束（狩衣）という装い、２部ではそれぞれの白いドレスに鮮やかな青のショールを纏って登場、見た目にもお客様を楽しませた。アーティストもスタッフもスマートに舞台を運び、休憩時にはお客様に『金川製茶』のアイスティーが振舞われ、終演後は鳴りやまない拍手を受けカーテンコールで「紅型ショール」を纏った二人が登場した。

森・東田のMCは好感度が高く、最後の挨拶でも「紅型工房の藤崎さん、いらしてますか～。」と手を振り会場を和ませる。そして、アンコールの《涙そうそう》の演奏では、左右の壁のスクリーンにACの様子が映され名護の方々との交流の様子が紹介された。終演後に二人がお客様の見送りに出たロビーでは、二人との記念写真にお客様方が列を成し、お客様方がコンサートを楽しんで下さったことを実感した。

色々な方との《つながり》を得られたことはもちろん、邦楽畑に身を置く一人としてステージングサポートをこなして下さるホールスタッフさんが増えてくれたら、スマートにお客様と向き合うアーティストが増えてくれたらと、夢が膨らむ《森・名護チーム》の事業だった。

アウトリーチ進行シート（沖縄県　名護市）
林　真智子（サブコーディネーター）

実施日	令和６年10月19日
実施先	屋部の久護家
対象・実施先の情報	対象：屋部の八月踊り保存会会員を中心 実施先の情報：1906年（明治時代後期）建築の沖縄県指定有形文化財であり、当時の豪農の家屋。
出演者（編成）	森梓紗（箏）、東田はる奈（笙）
ねらい／目標	異文化と“つながる”をテーマに、特にこのアクティビティでは、琉球文化と日本文化の違いを感じ、伝統をつなぐ者同士がインスパイアされるようなセッションの実施をねらいとした。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
	会場設営 開演前準備	・久護家の廊下中央から迫り出す形で仮設舞台（スチールデッキ）を設置 ・家屋手前の庭に客席を設営 ・蚊除け対策のため除草、（許可を得て）蚊取り線香設置 ・舞台下手側に箏を配置 ・暑さ対策のため、出演者は開演直前まで空調で冷やした車内で待機。車は会場（舞台）下手側に駐車	10月下旬だが最高気温は30度を超える夏日
15：00	開始アナウンス（１分）	ホール職員の方による開始のアナウンス	森さん（箏）下手側控え室に移動 東田さん（笙）客席から見えないように家屋の裏を通り上手側控え室に移動
15：01	４分	「さくら」の独奏（箏）	舞台下手より登場
15：05	MC ・森さん自己紹介 ・楽器紹介 ・聞き比べ ・M2への導入 （５分）	MC（森さん） 自己紹介 箏の紹介（江戸時代から続くもの、「俗箏」と呼ばれ、家庭にあった楽器であること） 「さくら」が箏の古典では伝統的な音階を用いられる曲であるという説明 琉球音階を弾いて、日本の音階との違いを聞き比べ 箏を習っていた母親の影響で子どもの頃から箏を弾いていた自分が、本格的に「箏をやりたい！」と思うきっかけとなった曲として「鳥のように」を紹介	
15：12	７分	「鳥のように」独奏（箏）	
15：15	MC ・笙、東田さんとの出会い （３分）	MC（森さん） 東京芸術大学で伝統的な楽器を扱いながら「現代箏曲専攻」として新しい音楽に挑戦する場にいたこと、そして「笙」や東田さんとの出会いについて話す	
15：19	４分	雅楽古典曲「黄鐘調 調子」独奏（笙）	東田さん、舞台上手より廊下を歩き、演奏しながら登場 舞台中央で独奏
15：23	MC ・東田さん自己紹介 ・笙の楽器紹介 ・M4への導入 （４分）	MC （東田さん） 自己紹介 笙の紹介（平安時代から続くもの、宮廷音楽であったこと、「鳳凰」が羽を畳んでいる様子を模していること、音を奏でるために温めなくてはいけないこと） （森さん） 笙の音色に惹かれていたこと、大学の先輩である東田さんの多様な活動を見て、いつか一緒に演奏したいと考えていたこと、箏は江戸で俗箏、笙は平安で宮廷音楽という違いから一緒に演奏する曲がなかったが、作曲を専門とする知人に曲を作ってもらったとして「泡沫リバース」を紹介	東田さん、中央から舞台上手に下がる
15：28	５分	「泡沫リバース」演奏（箏と笙）	舞台下手側で箏、舞台上手側で笙と、並んで演奏
15：33	MC ・ホールコンサートの告知 ・本日のお礼 ・M5への導入 （２分）	MC （森さん、東田さん） 明日10月20日は名護市民会館でコンサートがあります。 （森さん） 今日持ってきているのは13弦ですが、ホールコンサートでは20弦の箏でも演奏します。 ぜひ来てください。 最後に、皆さんにもお馴染みの曲をお聞きいただきます。本日は本当にありがとうございました。	箏の下にホールコンサートのポスターを置いておく 森さん、東田さんポスターを手に取り、客席に向けながらMC
15：35	３分	「涙そうそう」演奏（箏と笙）	
15：38		退場	舞台下手にはける

令和６年度
公共ホール邦楽活性化事業報告書

発行：一般財団法人地域創造
〒107-0052
東京都港区赤坂2-9-11　オリックス赤坂２丁目ビル９階
TEL：03-5573-4143
FAX：03-5573-4060
URL：https://www.jafra.or.jp/

発行日：令和７年６月